

表土：暗褐色土。数cmから20cmの腐植土。

I層：黄褐色土(10YR5/6)。1区西側に堆積するが、東側にはみられない。しまりはやや強く、粘性はやや弱い。炭化物を少量含む。縄文時代から奈良時代の遺物を包含する。

II層：黄褐色土から暗褐色土(10YR5/6～10YR3/4)。I区全体に堆積する。縄文時代から平安時代の遺物包含層。1区西側では上下2層(上から順にIIa層・IIb層)に分層できる。粘性・しまりは一定しないが、西側ほど両者とも強い傾向がある。

III層：黒褐色土(10YR3/2)。1区全体に堆積し、2区の一部にもみられる。本来は1・2区全域に広がっていたと推定される。しまり・粘性ともやや強いもしくは強い。根による影響等と推定される例外的なケースを除き、基本的に遺物は含まれない。

IV層：明黄褐色から明黄色土(10YR6/8～10YR5/6)。X層までの漸移層。

V層：黄褐色から暗褐色土(10YR5/6)。3区斜面部にみられる。粘性はやや強く、しまり弱い。遺物包含層。

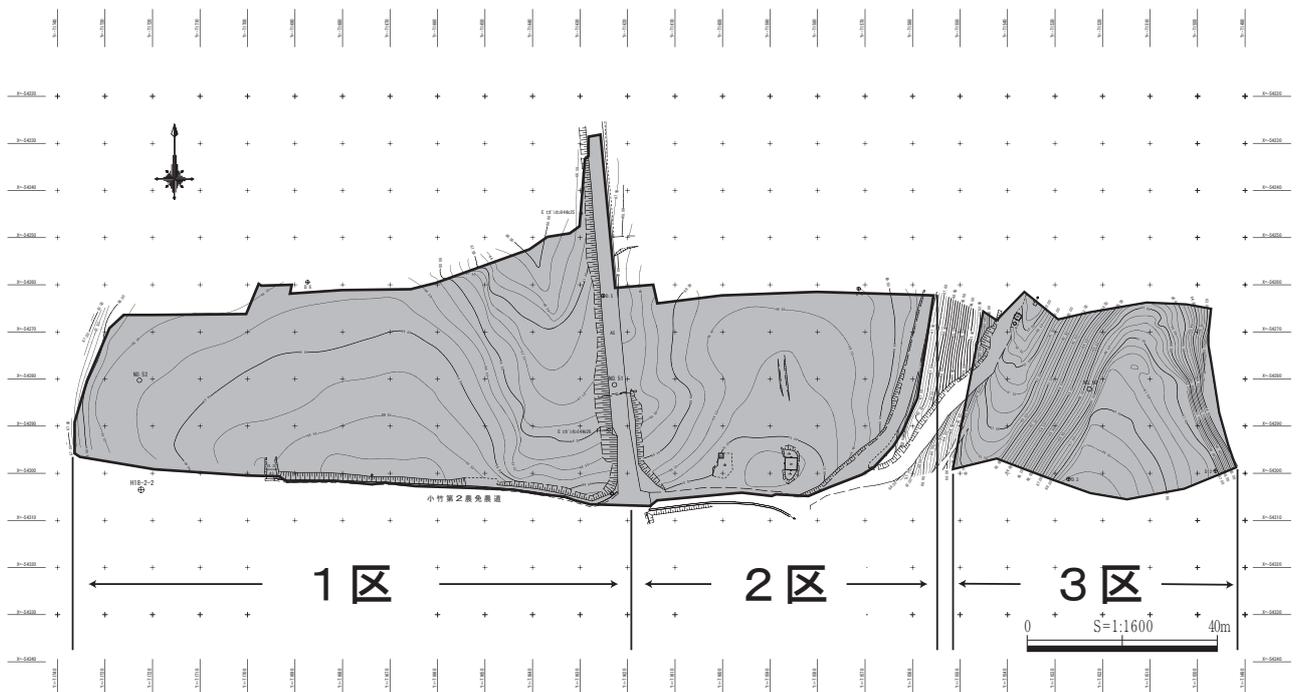
VI層：黒色土(10YR2/1)。3区斜面部にみられる。粘性はやや弱く、しまりもやや弱い。斜面頂部から中位にかけて拳大から人頭大の礫を多量に含む。

VII層：褐色土(10YR4/6)。3区斜面部にみられる。粘性はやや強く、しまりやや弱い。形5mm以下の小礫を多量に含む。

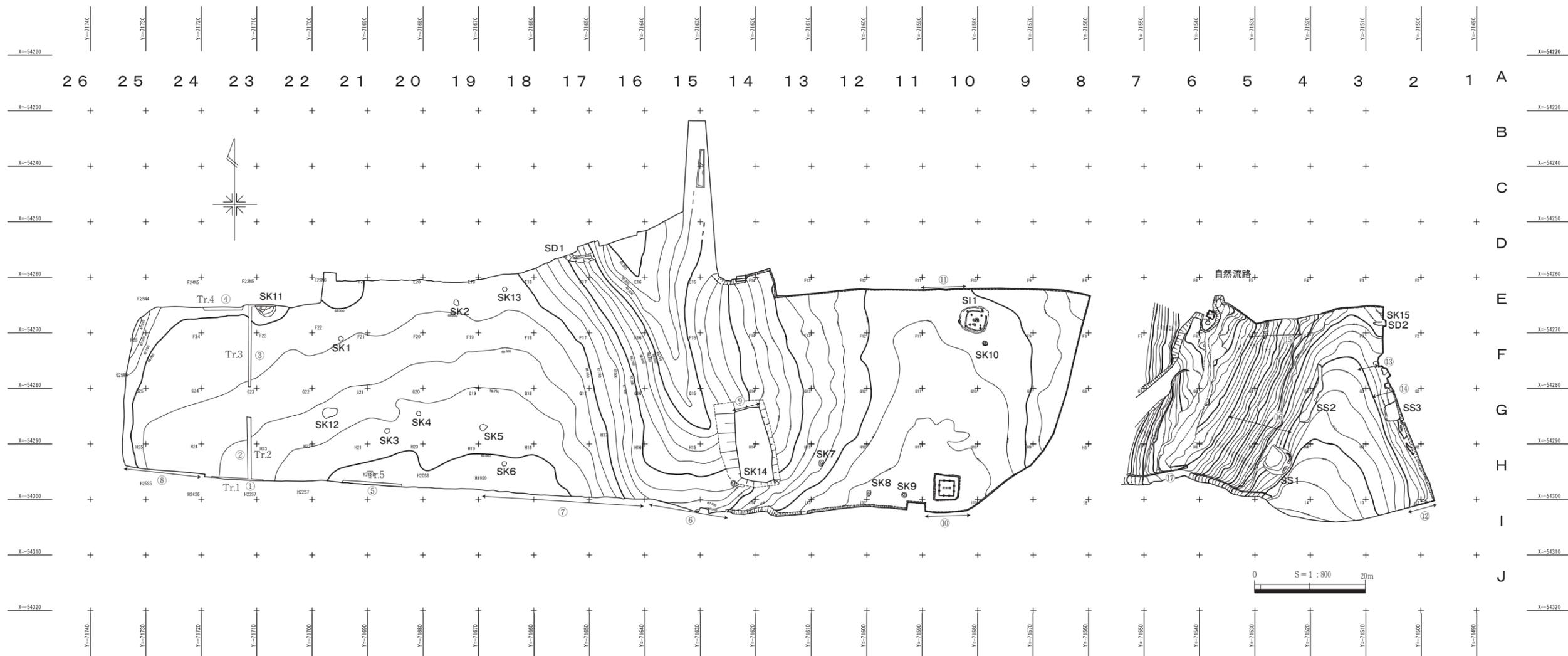
VIII層：黒褐色土(10YR3/2)。3区谷部にみられる。しまりはやや強く、粘性は強い。

IX層：暗褐色から黄褐色土(10YR5/6～10YR3/3)。3区谷部にみられる。4cm以下の小礫を少量含む。しまりはやや強く、粘性は強い。

X層：明黄褐色から橙色土。粘性強い。黄色系のローム層。調査地全域に認められる。いわゆる地山。



第38図 調査前地形測量図



土層断面記録地点

【1区】

- ① 1 トレンチ
- ② 2 トレンチ
- ③ 3 トレンチ
- ④ 4 トレンチ
- ⑤ 5 トレンチ
- ⑥ 南壁東端
- ⑦ 南壁中央部
- ⑧ 南壁西端

【2区】

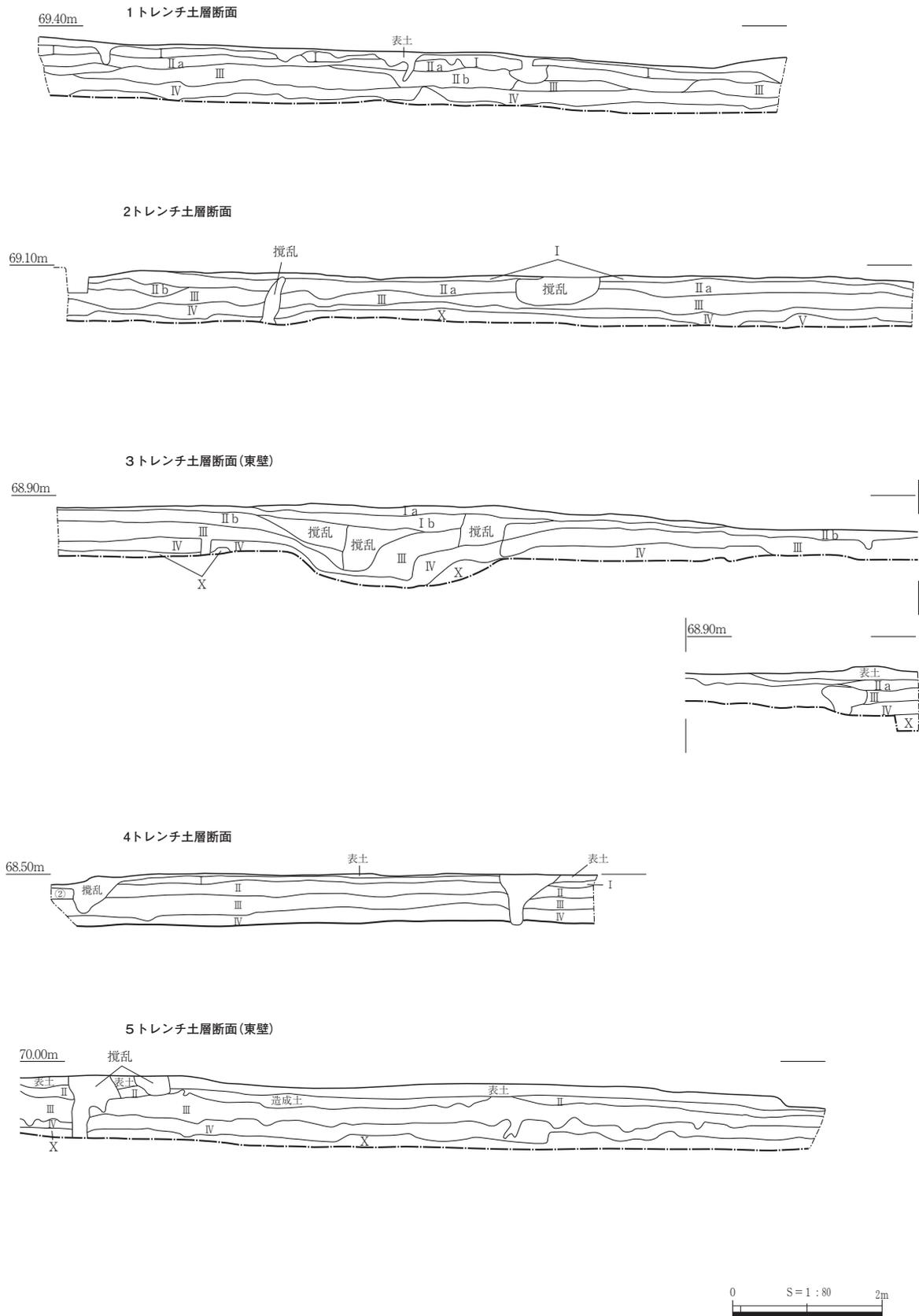
- ⑨ 西側谷部
- ⑩ 南壁中央
- ⑪ 北壁中央

【3区】

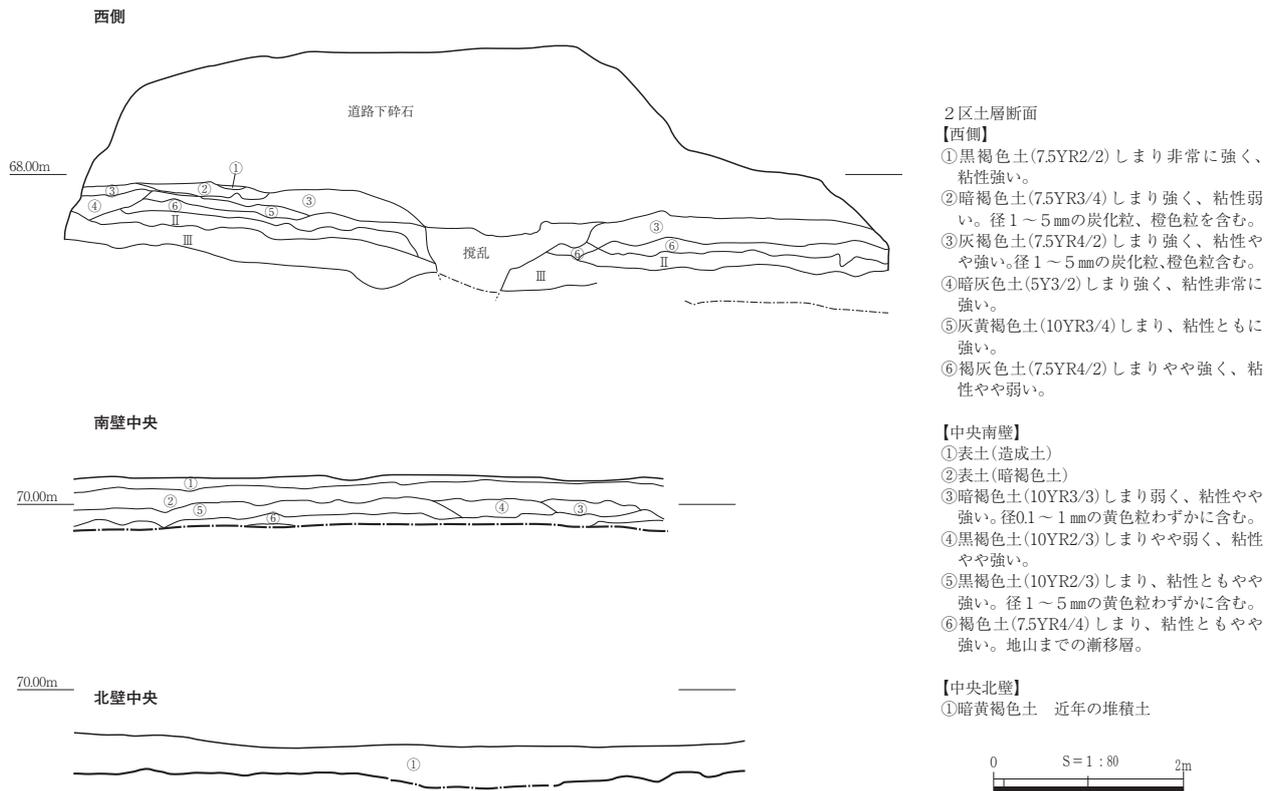
- ⑫ 東向き斜面南側
- ⑬ 東向き斜面中央
- ⑭ SS3 北側東向き斜面
- ⑮ 西向き斜面中央
- ⑯ 西向き斜面南側
- ⑰ 谷部南壁

※調査後地形測量図に遺構図を合成

第39図 豊成上金井谷峰遺跡遺構配置図



第40図 1区トレンチ1~5土層断面



第42図 2区土層断面

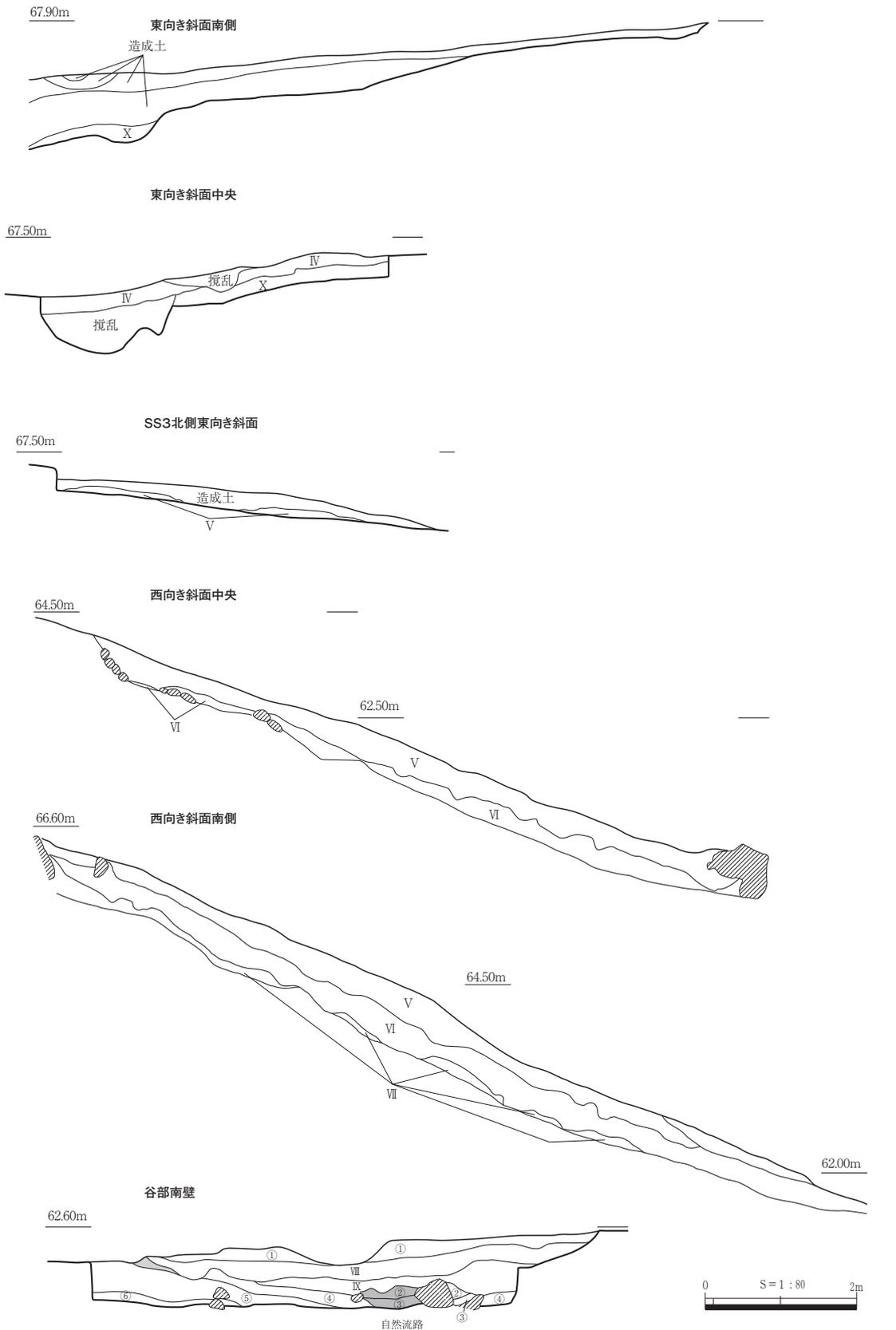
第2節 調査の概要

豊成上金井谷峰遺跡では、縄文時代から古代にかけての遺構・遺物を確認した。遺構は縄文時代と推定される落とし穴10基、弥生時代後期の竪穴住居跡1棟、古墳時代の土坑1基、テラス状遺構2基の他、時期を特定できないテラス状遺構1基、土坑4基、溝状遺構2条を検出した。また、3区では遺物を多く含む自然流路を確認した。

遺物は総量でコンテナ19箱であった。遺物包含層及び自然流路からの出土遺物が多く、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石鏃、打製石斧、礫石器等がある。

なお、本遺跡は平成20年度に確認調査が行われて、12本のトレンチが設定されている。遺構としてテラス状遺構1基・溝状遺構1条・土坑3基・ピット1基を検出している。これらのうち、1区西側Tr1で報告された土坑(SK1～3)は、調査の結果、根等による攪乱をうけ土層の乱れた痕跡であることを確認した。また、3区谷部Tr9で報告されたSD1も自然流路の堆積単位であることを確認した。

第4章 豊成上金井谷峰遺跡の調査



【3区谷部南壁土層断面】

①褐色土(10YR4/4)

VII層

IX層

②にぶい黄褐色土(10YR5/6)しまり・粘性あり。10cm以下の礫を含む。
自然流路埋土。

③黒褐色土(10YR5/6)しまり弱く、粘性あり。10cm以下の礫を多く含む。
自然流路埋土。

④暗褐色土(10YR5/6)しまり・粘性あり。8mm以下の砂礫をわずかに含む。

⑤黒褐色土(10YR5/6)しまり・粘性あり。8mm以下の砂礫をわずかに含む。

⑥黒褐色土(10YR5/6)しまりやや強い、粘性強い。8mm以下の砂礫をわずかに含む。

第43図 3区土層断面

第3節 縄文時代の調査

1 概要

遺物包含層中から縄文土器や石鏃、打製石斧など縄文時代後晩期とみられる遺物が出土した。縄文時代の純粋な包含層や明確な遺構面は確認していないが、1・2区のX層(地山)上面で落とし穴を10基検出しており、出土した遺物や埋土の類似性から、いずれも縄文時代後晩期のものと判断している。これら落とし穴は埋土が黒褐色系であるため、本来はⅢ層(黒褐色土)上面から掘り込まれたものと想定しているが、調査中は精査したものの平面形を検出することはできなかった。また、打製石斧7点及び磨石がほぼ同一レベルで近距離から出土しており、その出土状況から、これらは意図的に配置された可能性がある。

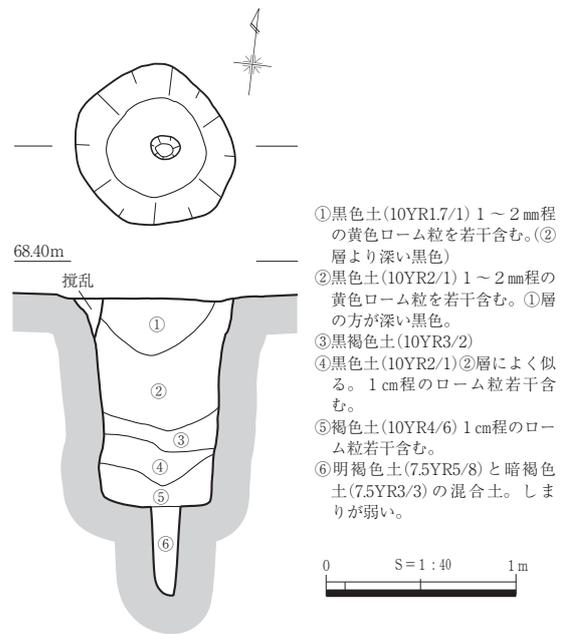
これらの遺構・遺物から、当地は縄文時代後晩期には狩猟場として利用されていたと考えられる。

2 土坑

SK 1 (第44図、PL.24)

F 21グリッド北側に位置する。底面中央にピットを伴う落とし穴である。平面形は径0.85mの円形を呈し、検出面から底面までの深さは1.1mを測る。底面のピットは径12~15cm、土坑底面からの深さ0.48mを測る。

埋土は黒色土を主体とする6層が認められ、底面ピットの埋土はしまりの弱い明褐色土が堆積していた。遺物は出土していない。このため、遺構の時期は判然としないが、他の落とし穴と同様、縄文時代の遺構と考える。

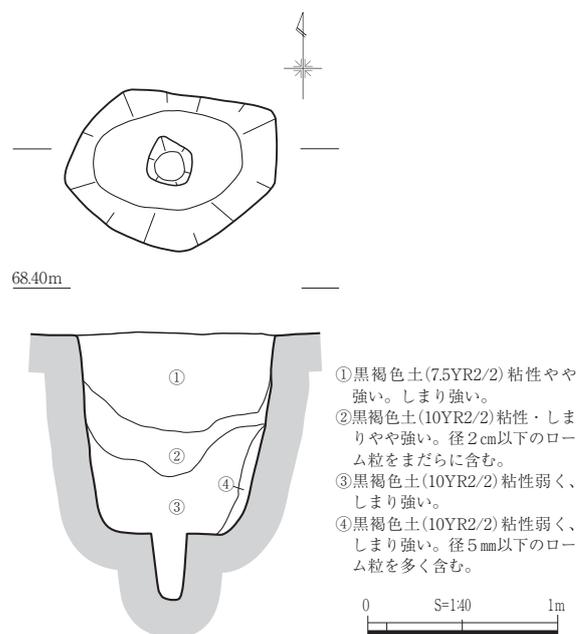


第44図 SK 1

SK 2 (第45図、PL.24・25)

E 19グリッド北東に位置する。底面中央にピットを伴う落とし穴である。平面形は長軸1.13m、短軸0.85mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは1.06mを測る。底面のピットは径25cm、土坑底面からの深さ36cmを測る。

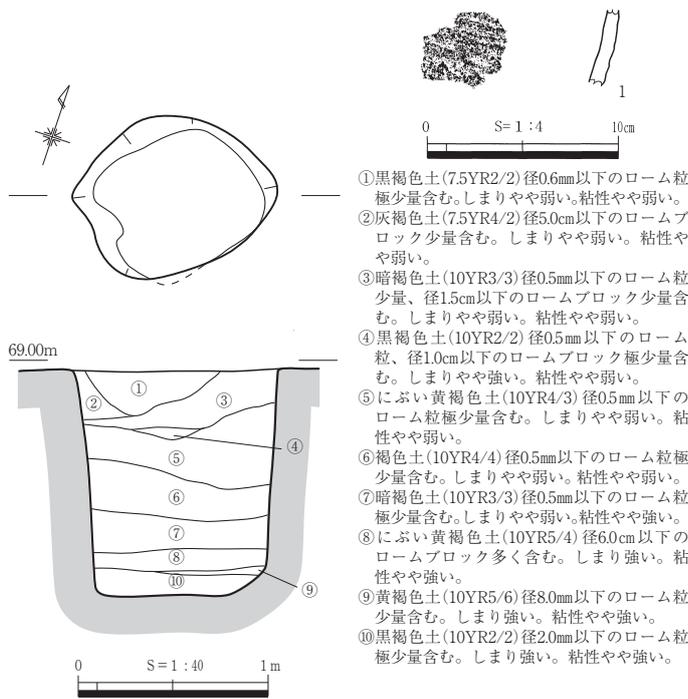
埋土は4層が認められ、いずれも黒褐色土である。遺物は出土していない。このため、遺構の時期は判然としないが、他の落とし穴と同様、縄文時代の遺構と考える。



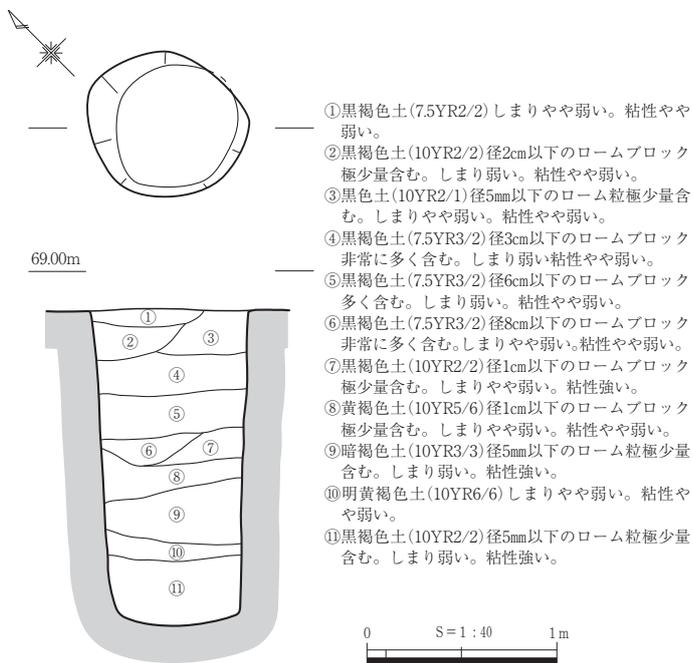
第45図 SK 2

SK 3 (第46図、PL.25・26)

1区中央部にほど近い、G20グリッドの南端に位



第46図 SK3 および出土遺物



第47図 SK4

置する。平面形は、東西の長い楕円形である。長径1.08m、短径は0.84mを測る。深さは1.2mで、埋土は10層に細分できる。黒褐色系の埋土を主体とし、全体的にロームの粒子ないしブロックが混ざる。底面の南側はややオーバーハンクしている。

規模・形態から、落とし穴である可能性が高い。埋土中から、土器片が1点だけ出土した。器面の摩耗が激しく遺存状態は悪いが、粗い胎土や内面のナデのあり方から、縄文時代後晩期のものと考えられ、本遺構もこの時期に位置づけられる。

SK4 (第47図、PL.25・26)

G20グリッドの東端、1区のはほぼ中央部に位置する。長径0.86m、短径0.74mという規模で、平面形は方形に近い円形を呈する。底面の平面形も同様に、北東隅がややオーバーハンクしている。底面までの深さは、1.76mである。埋土はしまりの弱い黒褐色系の土を主体とし、11層に細分できる。土質は、下層になるほど粘性が強くなっていく。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。しかし規模と形状や埋土の類似性などから、縄文時代の落とし穴であると考える。

SK5 (第48図、PL.25・26)

1区中央部にほど近い、G18グリッドの西端に位置する。平面形は東側の延びる歪な楕円形を呈し、長径1.36m、短径1.04mを測る。底面の平面形は円形を呈し、底面までの深さは1.92mである。埋土は9層からなる。しまりのやや弱い黒褐色系の土を主体とし、全体的にロームのブロックが混在する。

規模と形態、埋土の類似性から、縄文時

代の落とし穴であると考える。

SK 6 (第49図、PL.26)

1区中央の南側、H18グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、長径・短径ともに0.84mを測る。底面の平面形も、開口部同様の円形である。0.94mの深さをもつ。埋土は9層からなり、しまりのやや弱い黄褐色系の土を基調とする。

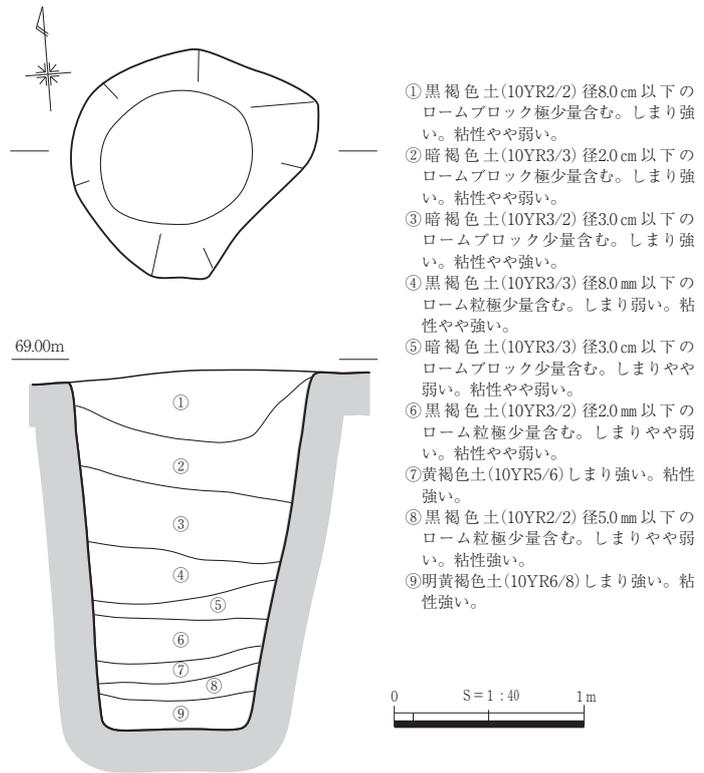
遺物の出土はなく、時期比定は困難であるが、規模・形状の類似性などから、縄文時代の落とし穴である可能性が高い。

SK 7 (第50図、PL.26)

H12グリッドの中央よりやや北西寄りに位置する。黒褐色土の楕円形プランとして検出した。平面形は長軸1.2m、短軸0.85mの楕円形であるが、底面は長軸0.65m、0.4mの方形の掘方であり、さらに径10cm、深さ16cmのピットを有する。断面形は中位付近がフラスコ状に張り出し、それより下位部はすぼまる形状を呈している。

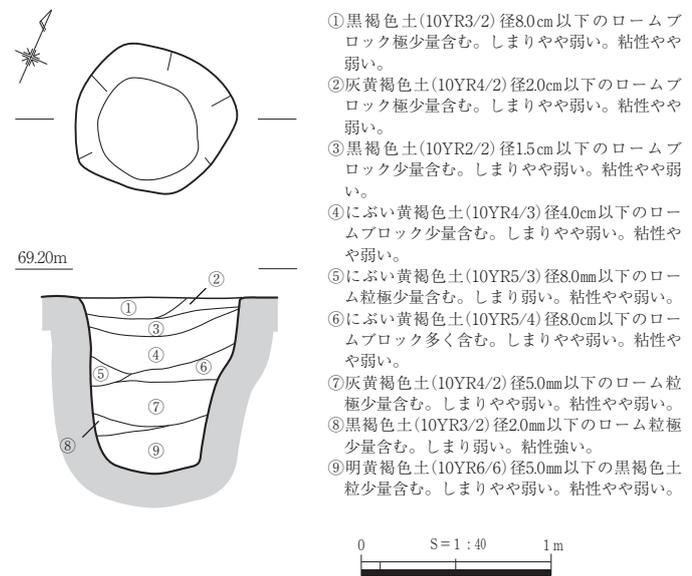
埋土を観察すると、②層以上を埋土とする部分と、③・④層を埋土とする部分に分けられそうである。張り出し部分に堆積する②層は、その下の③層とは土色の全く異なる黄褐色土であり、地山と見紛うほど均質で固く締まっている。レンズ状に堆積しており、自然堆積とも考えられるが、2区で認められる他の土坑の埋土が概ね黒色土系であることから、人為的に埋め戻された土の可能性もある。

このことから、本土坑の使用時期・形態を大きく2期に分けるとすれば、最初に平面形が方形の掘方の落とし穴として使用されていた時期があり、その後、落とし穴としては使用されなくなり、一部(③・④層)埋没した段階で断面中位の壁面をフラスコ



- ① 黒褐色土(10YR2/2) 径8.0cm以下のロームブロック極少量含む。しまり強い。粘性やや弱い。
- ② 暗褐色土(10YR3/3) 径2.0cm以下のロームブロック極少量含む。しまり強い。粘性やや弱い。
- ③ 暗褐色土(10YR3/2) 径3.0cm以下のロームブロック少量含む。しまり強い。粘性やや強い。
- ④ 黒褐色土(10YR3/3) 径8.0mm以下のローム粒極少量含む。しまり弱い。粘性やや強い。
- ⑤ 暗褐色土(10YR3/3) 径3.0cm以下のロームブロック少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑥ 黒褐色土(10YR3/2) 径2.0mm以下のローム粒極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑦ 黄褐色土(10YR5/6) しまり強い。粘性強い。
- ⑧ 黒褐色土(10YR2/2) 径5.0mm以下のローム粒極少量含む。しまりやや弱い。粘性強い。
- ⑨ 明黄褐色土(10YR6/8) しまり強い。粘性強い。

第48図 SK 5

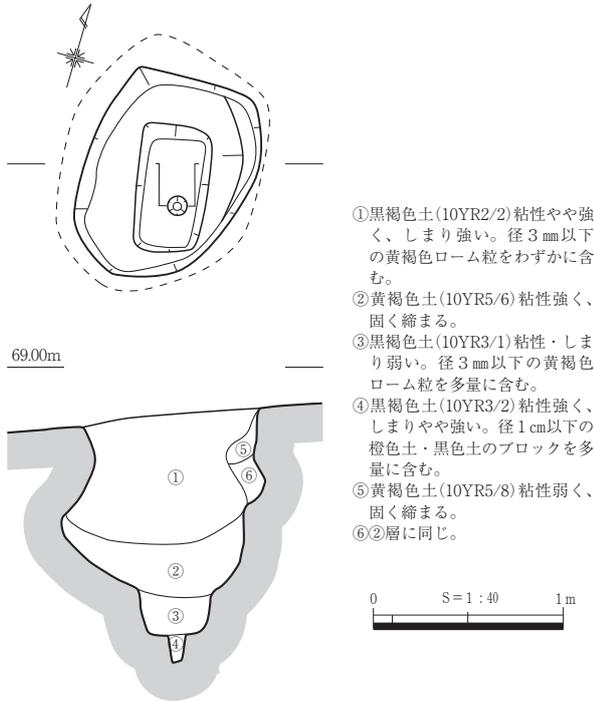


- ① 黒褐色土(10YR3/2) 径8.0cm以下のロームブロック極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ② 灰黄褐色土(10YR4/2) 径2.0cm以下のロームブロック極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ③ 黒褐色土(10YR2/2) 径1.5cm以下のロームブロック少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ④ におい黄褐色土(10YR4/3) 径4.0cm以下のロームブロック少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑤ におい黄褐色土(10YR5/3) 径8.0mm以下のローム粒極少量含む。しまり弱い。粘性やや弱い。
- ⑥ におい黄褐色土(10YR5/4) 径8.0cm以下のロームブロック多く含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑦ 灰黄褐色土(10YR4/2) 径5.0mm以下のローム粒極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑧ 黒褐色土(10YR3/2) 径2.0mm以下のローム粒極少量含む。しまり弱い。粘性強い。
- ⑨ 明黄褐色土(10YR6/6) 径5.0mm以下の黒褐色土粒少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。

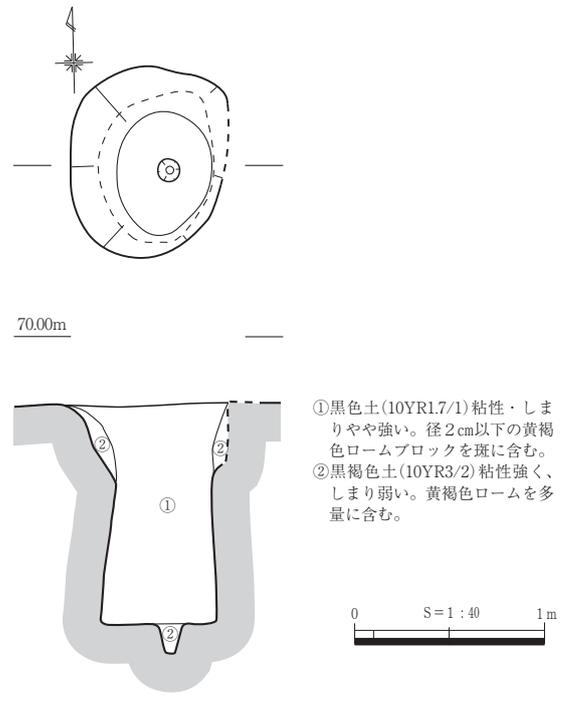
第49図 SK 6

状に掘り広げ、その時に掘られた土は一部もしくは全部を底に敷き詰め(②層)、袋状の土坑を形成し、貯蔵穴等の用途に供していた時期があると思われる。

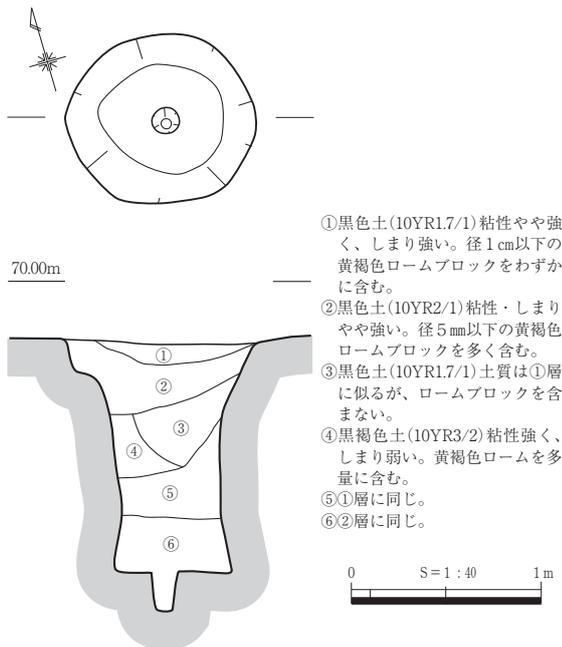
埋土中から遺物は出土しておらず、遺構の時期は詳らかにできないが、本遺跡で検出した他の落とし穴と規模や埋土が類似することから縄文時代の遺構であると考えられる。



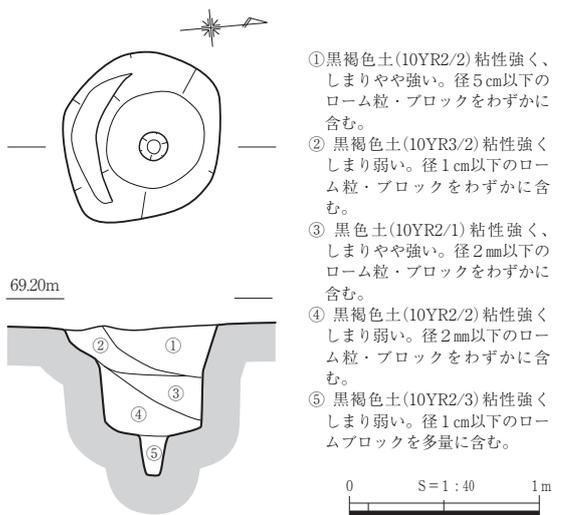
第50図 SK7



第51図 SK8



第52図 SK9



第53図 SK10

SK8 (第51図、PL.27)

H11グリッド南端に位置する。約6m東側にSK9がある。長軸1.0m、短軸0.8mの平面楕円形を呈する落とし穴である。底面には径12cm、深さ16cmのピットが1基認められる。遺物は認められず、遺構の時期比定は困難であるが、形状や埋土の類似性から、他の落とし穴と同様、縄文時代の遺構であると考えられる。

SK9 (第52図、PL.27)

H11グリッド南端に位置する。約6m西側にSK8がある。黒色土のプランとして検出した。平面形は直径約0.9mの円形で、検出面からの深さは約1.2mを測る。底面には径16cm、深さ20cmのピットが1基認められる。遺物は出土しておらず、時期は判然としないが、形状や埋土から、他の落とし穴と同様、縄文時代の遺構であると考えられる。

SK10 (第53図、PL.27)

F9グリッド北西隅の平坦面に位置する。黒褐色土の楕円形プランとして検出した。平面形は長軸0.9m、短軸0.8mの楕円形で、検出面からの深さは約0.6mを測る。底面には径16cm、深さ20cmのピットが1基認められた。遺物は出土しておらず、時期は判然としないが、形状や埋土から、他の落とし穴と同様、縄文時代の遺構であると考えられる。

第4節 弥生時代の調査**1 概要**

弥生時代の遺構は非常に希薄で、2区で検出した竪穴住居跡1棟(SI1)のみである。SI1は東西を谷に挟まれた丘陵上の平坦地に立地している。この竪穴住居跡は一度の拡張が行われており、拡張前の平面形は隅丸方形、拡張後は円形に近い隅丸方形を呈している。拡張後の住居は壁の一部に張り出し部分を有しており、出入口施設を備えていたと考えられる。

弥生時代の遺構はSI1のみであったが、当該期の土器は遺物包含層中から出土している。特に3区の斜面部や谷部、テラス状遺構の埋土などにあたる斜面の流出土に多く含まれており、2・3区の周辺は弥生時代に何らかの形で利用されていた土地であることがうかがえる。

2 竪穴住居跡**SI1 (第54～56図、巻頭図版2、PL.30・31・44)**

2区の中央部よりやや北東側、E10グリッドにおいて検出した。立地としては、東西に谷をひかえた丘陵上の平坦地にある。後世の削平により上層部分はなく、X層を掘り込んだ10～20cmの部分がかるうじて残存していた。遺構の北東隅および南東隅は、後世の果樹栽培などによる攪乱を受け破壊されている。

検出時の遺構の平面形は円形に近い隅丸方形で、西側が丸く延びている。

遺構の内部構造としては、ピット5基、壁に沿ってめぐる周壁溝があり、遺構内南側の床面上には焼土が検出された範囲がある。また西壁の中央付近に、出入口施設と思われる張り出し部分をもつ点

は特徴的である。周壁溝は、検出されなかった部分もあるが、本来は壁沿いを一周していた可能性がある。また、床面検出時に周壁溝より内側に溝状の痕跡を確認し、SI1は1回の拡張を伴う遺構であることが判明した。以下、拡張後(新)、拡張前(旧)の順に述べる。

(1)SI1(拡張後)

遺構の平面形は、先述のとおり円形に近い隅丸方形で、規模は東西5.1m、南北4.7mを測る。遺構埋土はやや粘性のある褐色系の土が主体であり、③・④層に遺物を含んでいた。このうち、床面に近い④層からの遺物出土量が多い。遺構西壁の中央部分には、長さ22cm、幅48cmの張り出し部を検出した。埋土は住居内の他箇所と同一のものが流入しており、住居を拡張した際に作られたものと推察する。張り出し部の床面規模が小さいため、もともとは壁に階段を掘り込む「階段タイプ」(高橋1997)の出入口施設を有していた可能性が高いと考える。

住居内をほぼ一周する周壁溝は、幅が平均6cm、深さ4cmで断面U字形を呈する。ピットは、柱穴と考えられるものが4基(P1～4)、掘りの浅い中央ピット(P5)が1基存在する。各ピットの規模は、計測表のとおりである(表8)。P3には近接して小さなピットが掘られており、底面も硬化していた。規模が非常に小さいため、P3の副柱的な機能をもっていた可能性が考えられる。P1～4の埋土はおおむね同質で、暗褐色・黄褐色系の埋土である。一方、中央ピットは一部が壊されており、褐色系の流入土⑤層によって埋没していた。

床面には、遺構の北東側と中央以外の部分において、広い範囲で厚さ2cm程度の貼床が確認された。貼床が検出されなかった遺構の中心部分では、中央ピットの南側に、焼土が浅く堆積している箇所が認められた。また、遺構の北西隅では床面直上において比較的多量の土器片が出土した(第54図)。土器片の出土状況は、集中的というよりもむしろ床面上に散布したような状態である。しかし近接する破片同士が高確率で接合し、甕一個体が復元できた。そのため、この土器の出土状況は、住居廃絶時の様相をとどめている可能性もある。

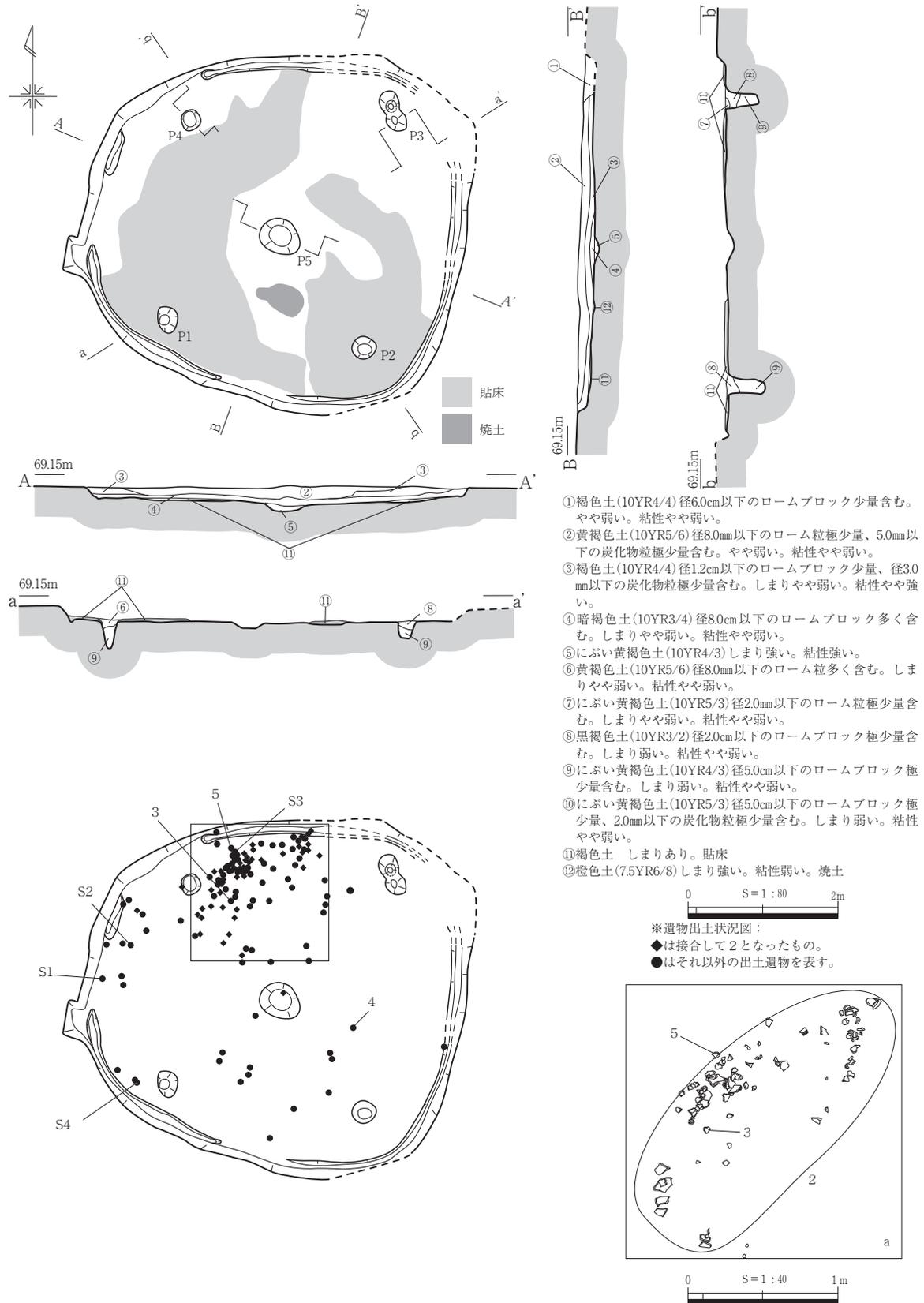
SI1(拡張後)出土遺物

拡張後住居の床面出土遺物は第56図2～5、S1～S4である。これらのほか、壺・甕の体部片なども出土したが、接合しない細片が多く、図示することは不可能であった。

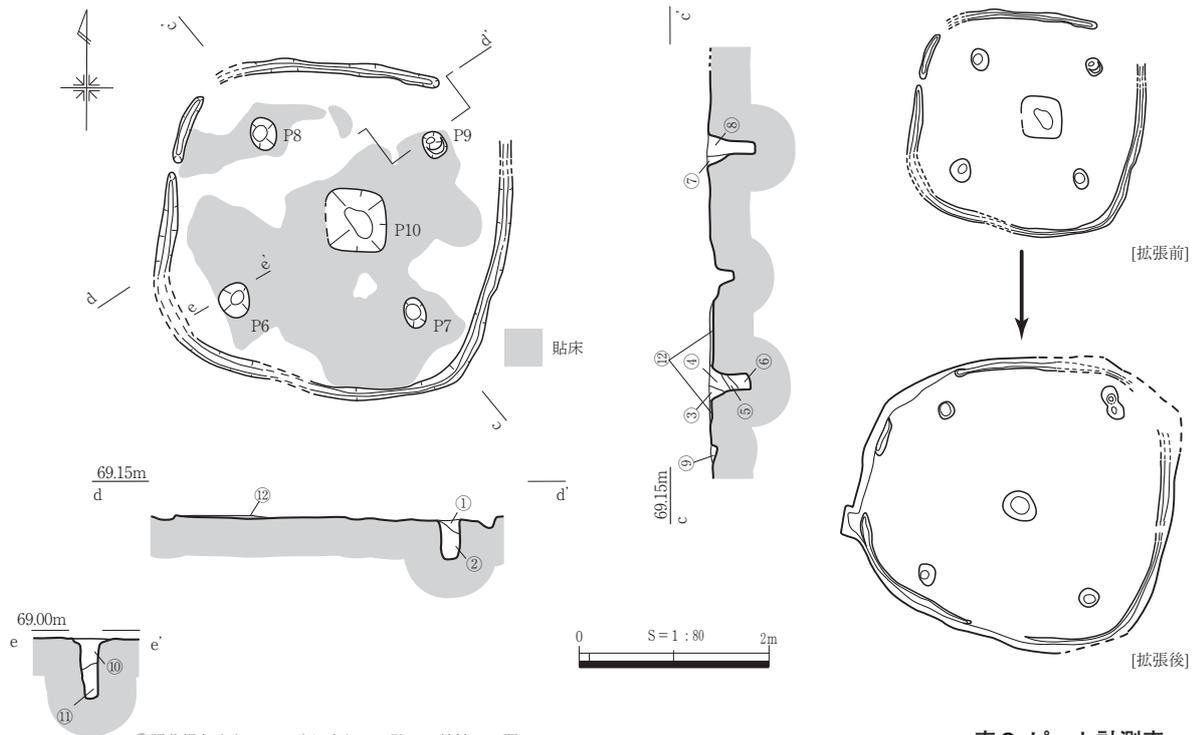
2は複合口縁の甕である。住居の北西隅、土器片の集中した範囲で出土したもので、多くの破片が接合し、全体の80%ほどまで復元できた。口縁部はやや外反気味に引き伸ばされ、口縁端部を丸くおさめている。底部には焼成後の穿孔がみられる。甕の底部穿孔などが住居の廃絶に伴うものかどうかは判然としないが、なんらかの祭祀的な意味をもって穿孔・破壊した可能性も考えられる。3・4は同じく甕の口縁部片である。3は住居内南西部、4は住居内の北東部において出土した。外面には多条の平行沈線文を施し、内面は横方向のナデで整えている。3は頸部の屈曲部下まで残存し、横方向のケズリ調整が確認できる。5は、甕あるいは壺の底部である。住居内南東側において出土した。底面に、わずかな凹みがみられる。

S1～4は軽石である。入り口部周辺や住居内北西部で検出された。いずれも加工はみられず、用途は不明である。

以上が、拡張後住居から出土した遺物である。良好な状態で復元できたものは少ないが、2～4の甕の口縁部、あるいは2の底部形状から、これらの土器は弥生時代後期後葉に位置づけられ、住居の廃絶時期もこの期間と考えられる。



第54図 SI 1 (拡張後)

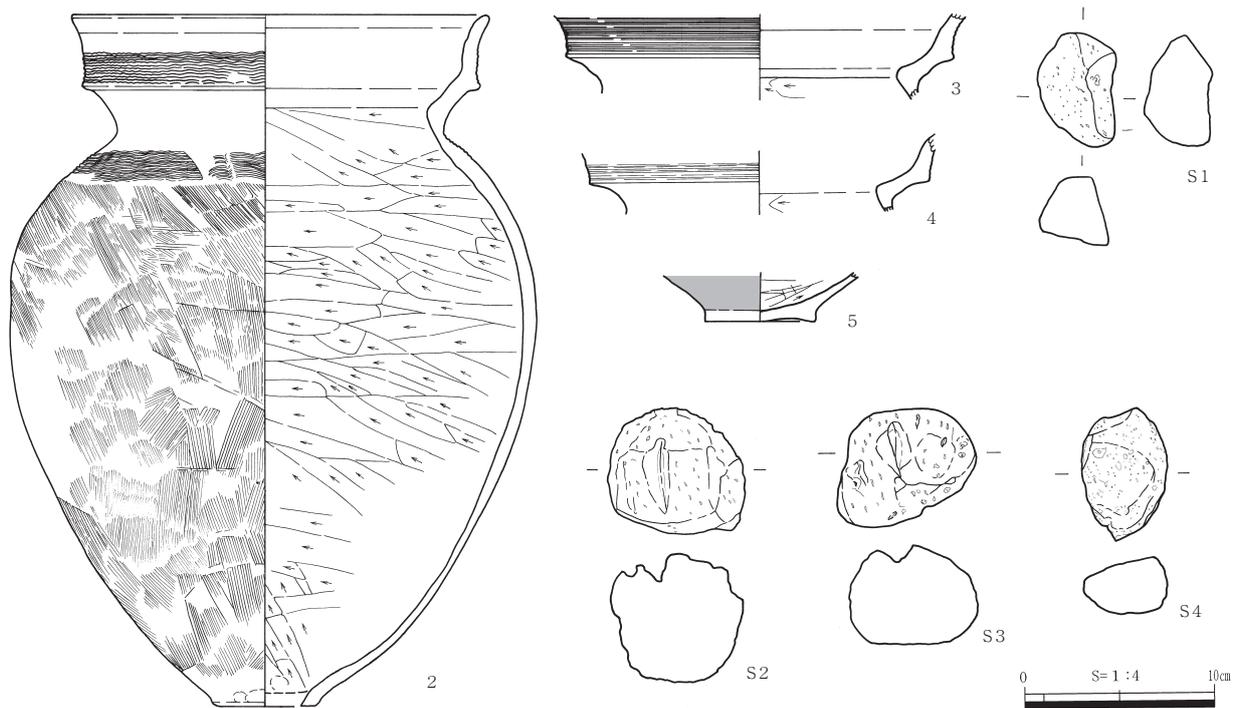


- ① 明黄褐色土(10YR6/6)しまりやや強い。粘性やや弱い。
- ② 黄褐色土(10YR5/6)径1.5cm以下のロームブロック極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ③ 明黄褐色土(10YR7/6)径8.0mm以下の炭化物粒極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ④ にぶい黄褐色土(10YR5/4)径8.0mm以下の炭化物粒極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑤ 黒褐色土(10YR3/2)径2.0mm以下のローム粒極少量含む。しまり弱い。粘性強い。
- ⑥ 灰黄褐色土(10YR4/2)径2.0mm以下のローム粒少量含む。しまり弱い。粘性強い。
- ⑦ にぶい黄褐色土(10YR4/3)径2.0mm以下の炭化物粒極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑧ 黒褐色土(10YR3/2)径5.0mm以下のローム粒少量含む。しまり弱い。粘性やや弱い。
- ⑨ にぶい黄褐色土(10YR5/3)径2.0mm以下のローム粒極少量含む。しまり弱い。粘性やや弱い。
- ⑩ にぶい黄褐色土(10YR4/3)径2.0mm以下のローム粒極少量、径0.5mm以下の炭化物粒極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑪ にぶい黄褐色土(10YR4/3)径1.2cm以下のロームブロック少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑫ 貼床

表8 ピット計測表

No.	長径×短径-深さ(cm)
1	38×30-44
2	37×30-50
3	32×26-22
4	28×28-44
5	54×48-10
6	36×22-44
7	37×22-50
8	40×28-42
9	28×24-42
10	67×61-53

第55図 SI 1 (拡張前)



第56図 SI 1 (拡張後)床面出土遺物

(2)SI 1 (拡張前)

住居の拡張後に敷かれた貼床を除去すると、拡張前のピット5基と溝を検出した。溝は方形にめぐっており、拡張前の住居の周壁溝であったと考えられる。幅7cm、深さ6cm、長さは一片がおよそ3.2mである。この周壁溝の形態から、拡張前の住居の平面形は拡張後のものよりも、形の整った隅丸方形をとっていた可能性がある。

拡張前の内部構造は、拡張後と同様、柱穴と思われるピット4基と中央ピット1基からなる。P7については埋土が4層に細分されるが、それ以外のピットはしまりのやや弱い黄褐色系の土質を主体とする。また、中央ピット(P10)は平面形が方形、底面は円形で中心部のみが深めに掘り下げられている。

拡張前の住居においても、広い範囲で厚さ2cm程度の貼床が確認された。拡張後住居のものよりも、硬く貼られている。

遺物は、拡張後住居の貼床を除去する際に、土器片が数点出土した。いずれも摩耗の激しい細片であり、図化することは不可能であった。

SI 1 まとめ

本遺構について整理を行うと、まず隅丸方形の住居から、少し形の乱れた円形に近い隅丸方形の住居へと拡張されている点が指摘できる。また、住居を拡張する際には、西壁の中央部付近に出入口施設を設けている。このような出入口施設をもつ竪穴住居跡は、管見に触れた限りでは、鳥取県内で2例目の検出である⁽¹⁾。

出土遺物としては甕・軽石が出土している。床面に散乱した甕の底部が焼成後に穿孔されている点の特徴的である。拡張後の床面から出土した甕から、本遺構が廃絶された時期は弥生時代後期後葉に位置づけられる。

(1)ただし、北栄町(旧大栄町)西高江遺跡の竪穴住居4号にみられる張り出し部を、高橋泰子の述べる「張り出しタイプ」(高橋1997)の出入口施設と認定できるならば、本遺跡は県内で3件目の検出例となる。西高江遺跡の報告書では、出入口施設の可能性等の指摘はないため、現状での判断は困難である。

SI 1のほかに「階段タイプ」の出入口施設をもつ住居の例としては、妻木晩田遺跡松尾頭地区の第36号竪穴住居跡がある。時期的に近い点、出入口から予想できる住居の主軸が東西方向である点など、SI 1と共通する要素もあり、当該期の生活様相を考える上では興味深い。

高橋泰子1997 「梯子以外の出入り口施設 - 出入口施設は梯子穴だけではない -」『土壁』創刊号 考古学を楽しむ会

大栄町教育委員会1981 『東高江・西高江遺跡発掘調査報告』東伯郡大栄町教育委員会

第5節 古墳時代の調査

1 概要

古墳時代の遺構は、1区に土坑1基(SK11)、3区にテラス状遺構2基(SS1、SS2)がある。また、明確な時期は不明であるが、3区に古墳時代前期の土器が多く出土した自然流路がある。

2区には古墳時代の遺構は分布しておらず、遺跡内に古墳時代の遺構は数少ないが、自然流路にはこの時期の土器が多く含まれていることから、当遺跡周辺に集落が営まれていたことが推定できる。2区は攪乱が著しいため、存在していた遺構が失われている可能性もあろう。

2 テラス状遺構

SS1 (第57・58図、PL.32、48)

本遺構は、3区南側丘陵平坦面と丘陵西側斜面の傾斜変換点に位置するテラス状遺構である。H4グリッドにあたる。斜度およそ17°の斜面を2段に掘削し、テラス状の平坦面を形成している。遺構の平面形は隅丸方形を呈する。

上段のテラスは幅が最大1.1mを測り、斜面上方にあたる壁際に溝を2条検出した。溝の幅は24～70cm、深さは18cm程度で、本来は壁際を弧状に巡っていた可能性がある。下段のテラスは長軸3.6m、短軸2.6mを測る。平面形態から本来は床として機能していたと考えるが、テラスが谷部にかけて緩やかに傾斜していることから、床面は流失し、遺存していない可能性もある。検出したテラスには柱穴や周壁溝は認めなかった。また遺構周辺についても柱穴は検出していない。

埋土は2層からなり、いずれも斜面上方からの流入土であり、しまりの弱い黄褐色系の土が堆積している。

遺構内の遺物は、2層ある埋土のうちの①層より比較的多く出土している。遺物は小片がほとんどであったが、比較的遺存状態の良好なものを図示した。

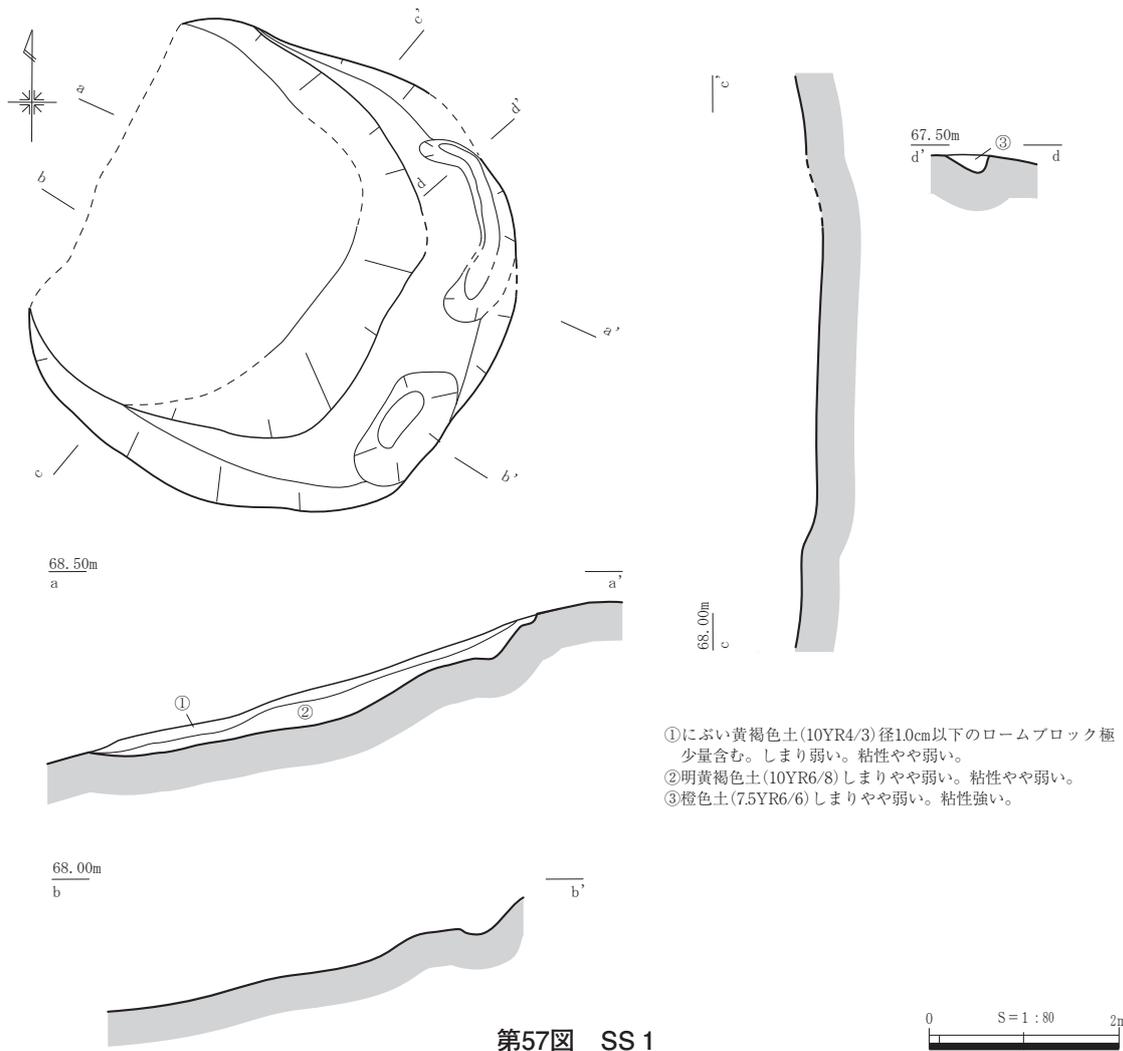
6～10は複合口縁甕の口縁部である。6・7の口縁部は器壁がやや厚く、わずかに外反させながら上方へ引き伸ばしている。内外面とも横方向のナデを施し、端部は丸くおさめている。また、口縁部下端の稜は下方へつまみだすような形態をとる。7は外面に緩やかな波状文を施し、内面は頸部の屈曲部分直下にヘラケズリ調整が確認できる。8は6・7よりも口縁部が高く、復元口径もやや大きい。9と10は器壁の反る口縁部形態をとり、口縁部下端は外方へ引き出すような形態である。

11・12は複合口縁甕の頸部から肩部の破片である。いずれも、口縁部上方は残存していない。11は肩部がそれほど張らず、口縁部が短い小型の甕になる可能性もある。

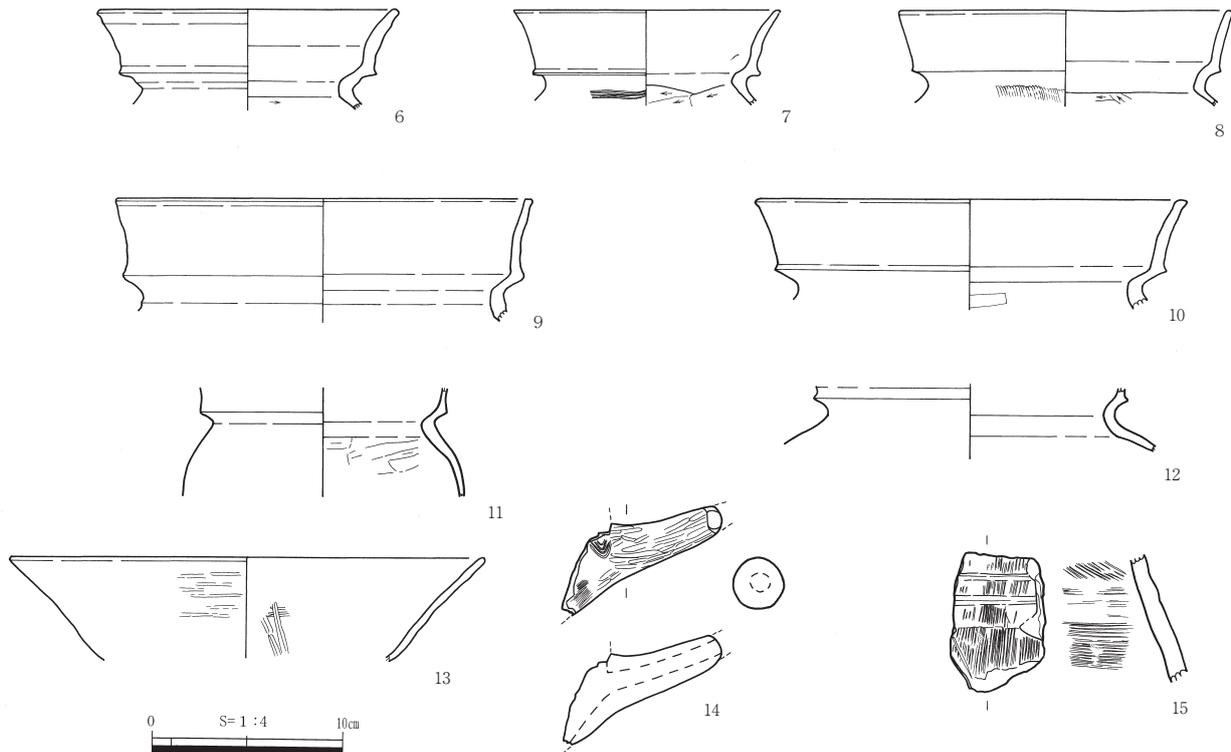
13は鼓形器台の受部である。器壁が薄く、口縁部へかけて緩やかな湾曲を描きながら外方へ開いている。14は注口付土器の注口部である。外面には丁寧なヘラミガキ調整を施し、注口の付け根には体部からつながるであろう波状文がみられる。15は弥生時代中期にあたる壺の頸部片である。SS1の埋土から出土した遺物の中では、もっとも古い様相を呈している。

以上が、SS1出土の遺物である。いずれも埋土中からの出土であり、遺構の床面において検出された遺物はない。そのため、遺構の帰属時期を直接的に示す指標はないが、それぞれの遺物の時期を検討しておきたい。

先に述べたとおり、15に挙げた壺の頸部片はもっとも古く、弥生時代中期頃のものと考えられる。また14の注口付土器も、全形は不明であるものの、形態や丁寧なヘラミガキ調整、波状文などから弥



第57図 SS 1



第58図 SS 1 出土遺物

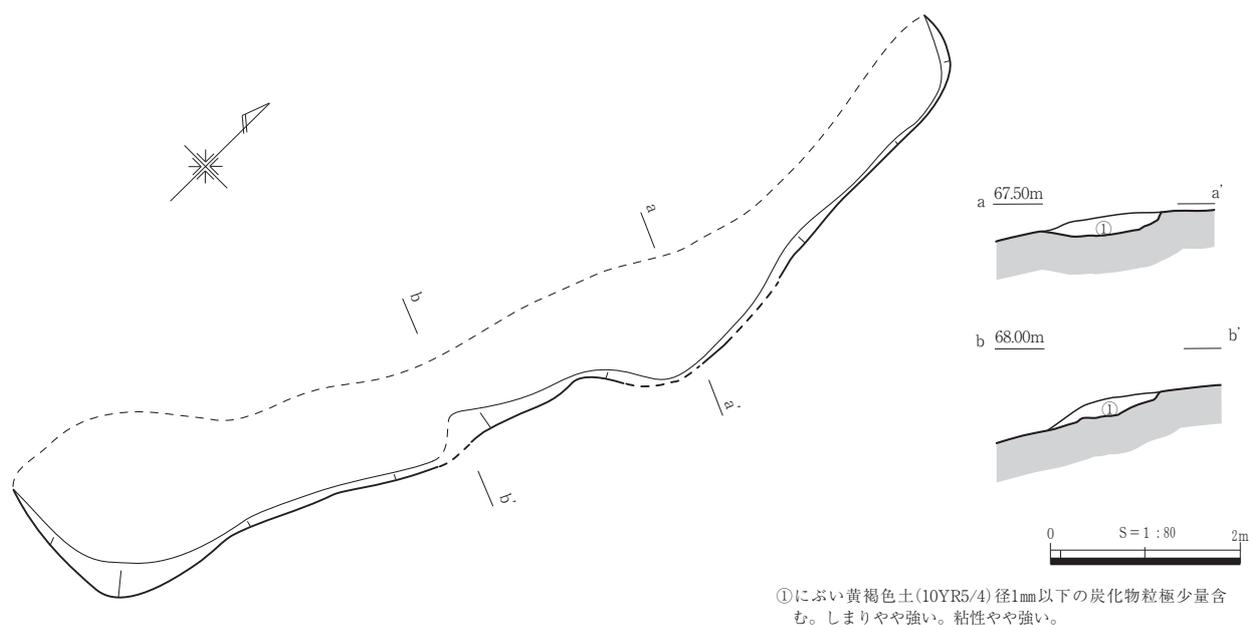
生時代後期前葉頃のものと同推察される。それらに対し、比較的まとまった時期の様相を呈しているのは7～13の甕の口縁部・頸部片、ならびに鼓形器台の受け部片である。6～8・11は器壁が厚く、口縁部端部や口縁部下端の形態から弥生時代後期後半～終末期の特徴をもっているともみられる。しかしそれ以外の遺物は、寸法や口縁部形態からやや時期の下るものと捉えられ、弥生時代終末期～古墳時代初頭にあたるものと考えられる。

以上のことから、本遺構の使用時期は絞りこみが難しいのであるが、遺構の埋没時期はおおよそ古墳時代初頭に位置づけられるだろう。

SS2 (第59図、PL.33)

丘陵上平坦面の西側肩部にあたるF3・G3・G4グリッドの、北側へ緩やかに下っていく斜面との地形変換点に位置する。SS1と同様、遺構の大部分は流出してしまっていると考えられる。残存する平坦面の規模は、南北11m、東西は残りの良い部分で1mと南北に長い。埋土は単層である。南北に二ヶ所のトレンチを設けて埋土の確認を行ったが、いずれも同様の土質であった。規模・形態から、二つのテラス状遺構が切り合っている可能性もある。しかし遺構の流出が激しく、切り合いなどを確認することは不可能であった。

遺物としては土器片が出土している。器面摩耗が激しい小片であるが、残存する器形や調整から、SS1と同様に弥生時代終末期～古墳時代初頭までの使用であったと考えられる。

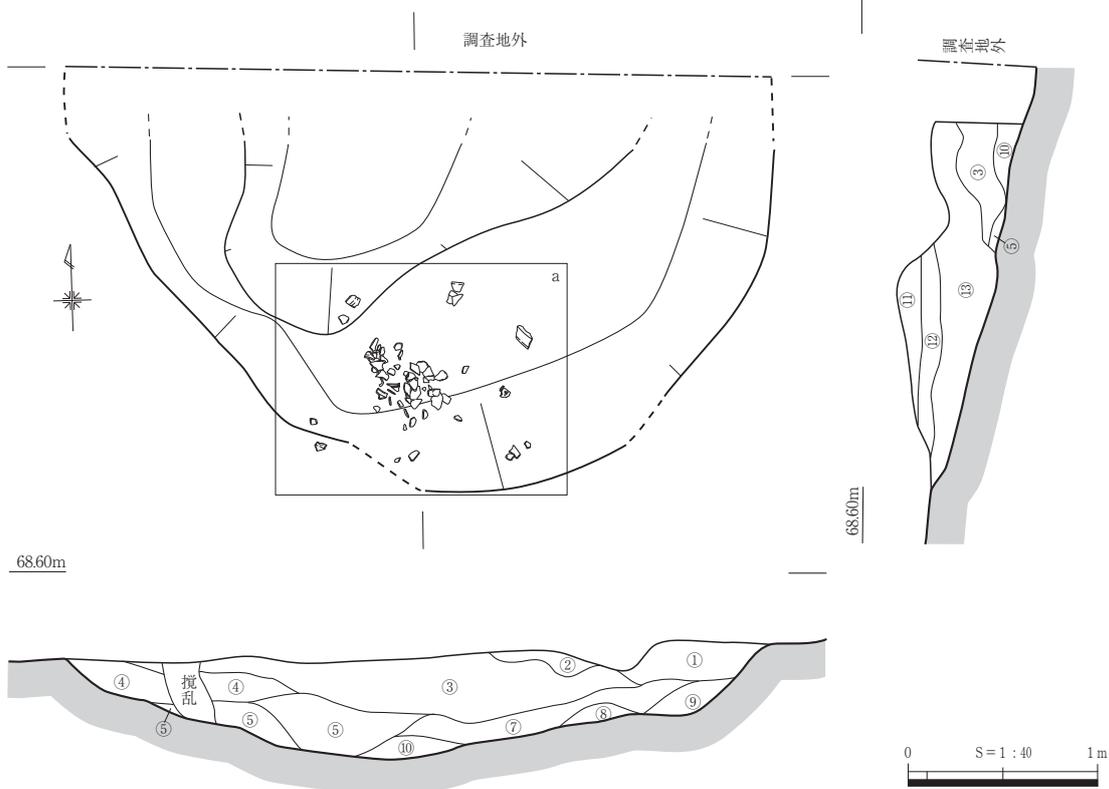


第59図 SS2

3 土坑

SK11(第60・61図、PL.34・44、写真3)

1区西側E22グリッド、北西に向かう緩斜面に位置する。Ⅲ層上面で精査中に暗褐色土のプランとして検出した。北半分は調査地外に広がるため、本来の規模・平面形は明らかではないが、確認できた範囲では東西3.7m、南北2.2mを測る。底面は掘り鉢状を呈し、検出面からの深さは最大で0.4mを



- ①暗褐色土(10YR3/3)粘性あり。しまり弱い。径5mm以下の黒色土粒を多く含む。
- ②褐色土(10YR4/6)粘性あり。しまり弱い。径5mm以下の黄褐色土粒を多く含む。
- ③褐色土(10YR4/6)粘性・しまりあり。径2cm以下の黄褐色土ブロック、径5mm以下の黒色土粒を多く含む。
- ④暗褐色土(10YR3/3)粘性あり。しまり弱い。径5mm以下の黄褐色土粒・黒色土粒を多く含む。
- ⑤黒褐色土(10YR3/2)粘性弱く、しまり強い。径5mm以下の黄褐色土粒・黒色土粒を多く含む。
- ⑥黒褐色土(10YR2/3)粘性・しまりあり。径5mm以下の黄褐色土粒・黒色土粒を多く含む。
- ⑦褐色土(10YR4/6)粘性あり。しまり強い。径2cm以下の黄褐色土ブロック、径5mm以下の黒色土粒を多く含む。
- ⑧黄褐色土(10YR5/8)粘性・しまり強い。
- ⑨暗褐色土(10YR3/3)粘性強く、しまり弱い。径1cm以下の黄褐色土粒・黒色土粒を多く含む。
- ⑩褐色土(7.5YR4/6)粘性・しまり強い。
- ⑪黒褐色土(10YR2/3)粘性強い。しまりあり。
- ⑫暗褐色土(7.5YR3/4)粘性弱い。しまりあり。
- ⑬暗褐色土(10YR3/4)粘性弱く、しまりあり。微細な炭化物を含む。黄褐色ロームブロックをわずかに含む。

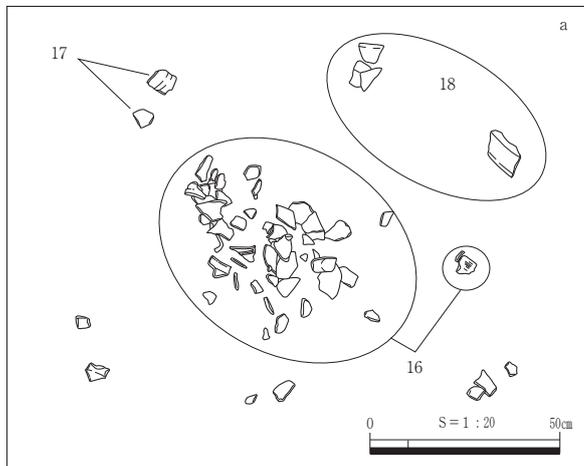


写真3 SK11遺物出土状況

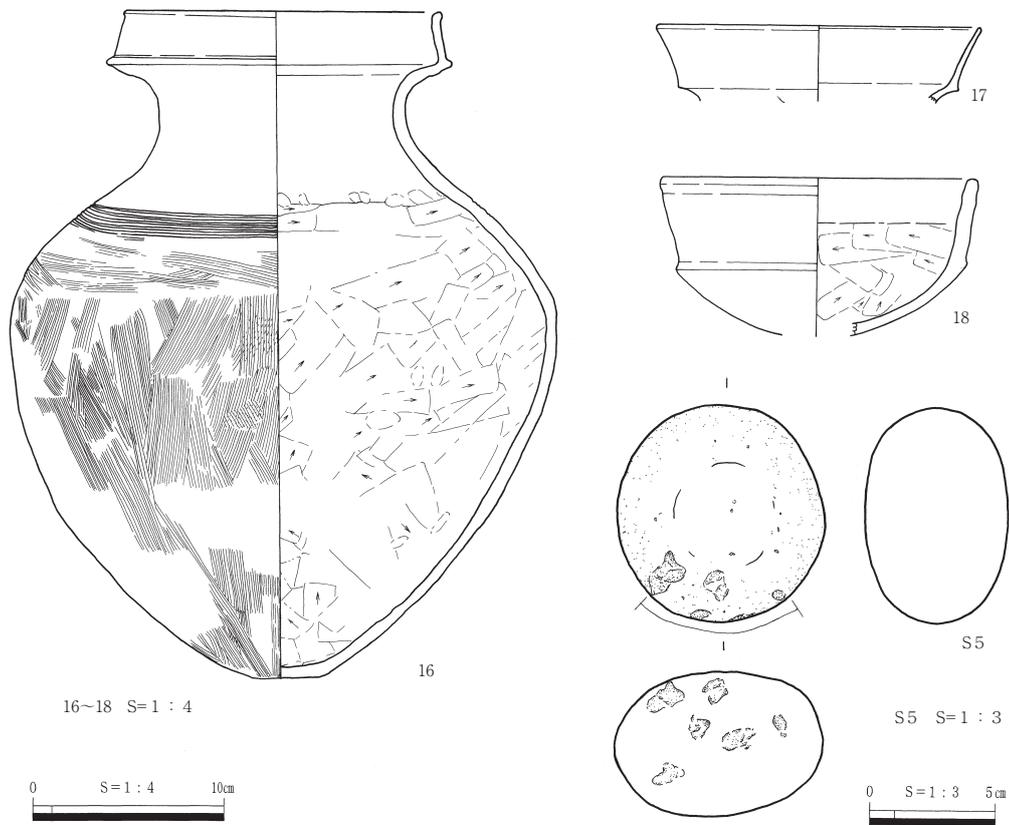
第60図 SK11

測る。調査地外も含めた全体の平面形は、やや歪な円形を呈すると思われる。検出した範囲では底面にピットや被熱面等は認められなかった。埋土は13層に分けられる。土質が均質ではなく、ほとんどの層で本遺構の周辺の土層に認められる黒色土や黄褐色土の粒を多く含んでいることから、本土坑の埋没は、自然堆積よりも人為的な埋め戻しによる可能性が高いと考える。

遺物は、埋土上層の⑪、⑫層を中心として出土した土師器3点と石器1点を掲載している。16は壺で、ほぼ完形に復元できた。内傾する複合口縁をもち、胴部は倒卵形を呈す。底部は不明瞭な平底である。17は甕の口縁部。内外面ともナデ調整を施しており、外面にはススが付着する。18は埴である。丸底で、口縁部に緩い段を付ける。S5は磨石である。なお、出土位置の近傍には、近年の植林による木の切り株があり、その樹根周辺から多く出土していることから、根の成長に伴って持ち上げられたために出土レベルが本来の位置より高くなっている可能性も考えられる。

本遺構の性格は詳らかでないが、先述のように、遺構周辺の土層に認められる土のブロックや粒が混じった土で埋め戻されている可能性が考えられることや、ほぼ完形に復元できる壺や埴が土坑底面付近ではなく層位的に高い位置から出土していることなどから、土器が供献された土壙墓の可能性も考えられる。

遺構の時期は、16の壺や18の埴が古墳時代前期頃にみられる形態であることから、この時期に収まると考える。



第61図 SK11出土遺物

第6節 時期不明の遺構

1 テラス状遺構

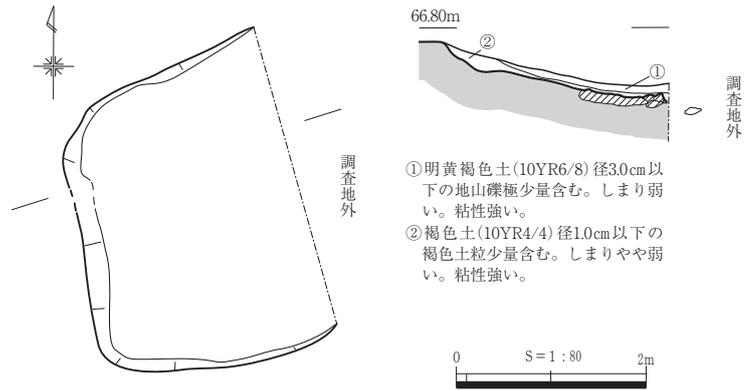
SS3 (第62図、PL.35)

丘陵上平坦面の東側肩部にあたる、G2グリッドに位置する。調査地の東端に立地し、遺構の半分は調査地外に続くものと考えられる。3区東側の一部に堆積していた造成土除去後にX層上面にて検出した。

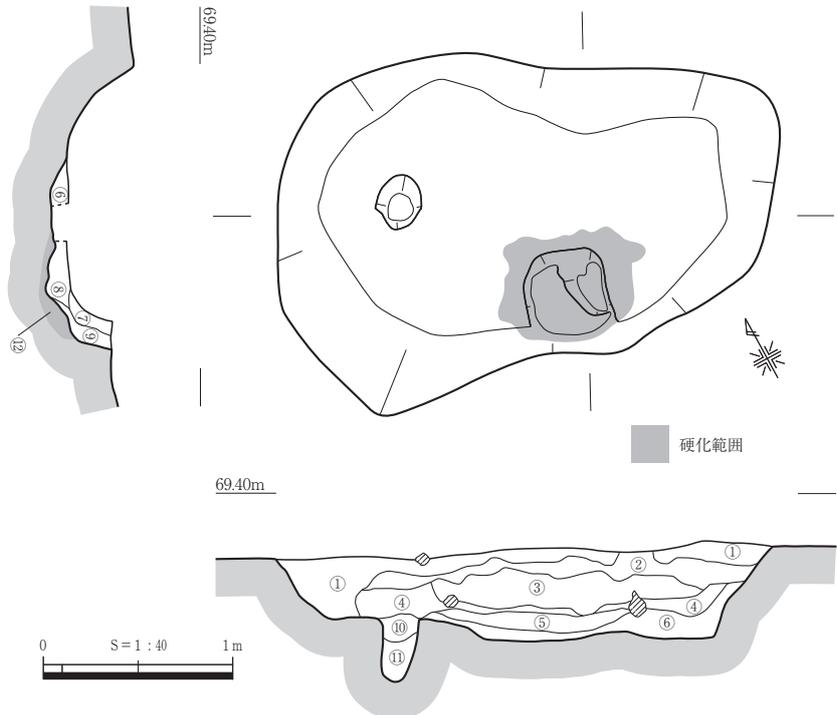
本遺構は、谷部へむけて傾斜の切り替わっていく緩斜面を、段切りして形成している。東西2.4m、南北3.2mと規模は大きくない。埋土は2層からなり、②層の下は、すぐに地山由来の岩盤層が顔を覗かせる。また、遺構の底面南側は樹根により一部破壊されており、残存状況は良くない。遺構内およびその周辺には、柱穴は認めなかった。

遺構内および遺構周辺から遺物は出土しておらず、本遺構の時期・用途はともに不明である。

なお、本遺構よりも南側の調査地壁際および調査地内の斜面部では、岩盤が平坦面をなす範囲がある。遺構としての痕跡を見出すことはできなかったが、調査地内ならびに調査地周辺において、斜面をテラス状に段切りし、何らかの形で使用していた可能性も考えられる。



第62図 SS3



第63図 SK12

2 土坑

SK12 (第63図、PL.35)

G21グリッドの北西端、丘陵のほぼ平坦な場所に位置する。

Ⅱ層上面にて焼土粒の広がりが見えられたが、平面的には明確な掘り込みプランが確認できなかったため南辺側をさらに掘り下げてプランを確認した。そのため、平面図では南側の上場が本来のプランよりやや小さく

なっている。

規模は長軸2.6m、短軸1.8mの歪な楕円形を呈する。北側の壁の立ち上がりは急角度であるのに対して、南側は緩やかに立ち上がる。深さは検出面から約50cmを測る。底面はⅢ層の黒褐色土で形成されており、南端部分ではほかの底面より掘り鉢状に4cm下がって径約66cmの範囲でⅢ層の黒褐色土が非常に硬化した面を検出した。硬化面の表面は非常に凹凸があり、最大で深さ6cmまで硬化していた。被熱によるものと推定される。また、北西には径28cm、深さ34cmのピットを確認した。

埋土は11層に分けられ、いずれも焼土を含んでいる。1～4層は橙色の焼土を含み、3層はほぼ焼土のみで構成されている。底面に近い5・6層は硬化面に見られるような黒色焼土を含んでいる。

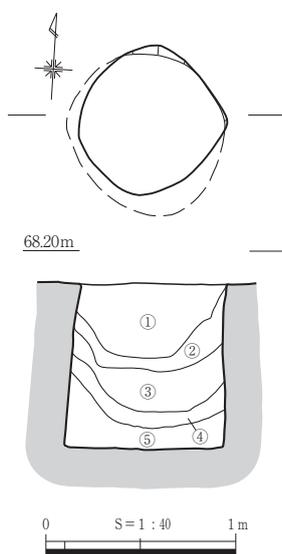
3層は焼土が最大で22cmとかなり厚く堆積していることから長期にわたる高温の火の使用が想定できる。一方で炭化物は1層で若干確認できたのみで、一般的な炭窯のような取りこぼしの炭も出土していないため、炭窯とする根拠に乏しくこの遺構の性格は不明といわざるをえない。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

SK13(第64図、PL.36)

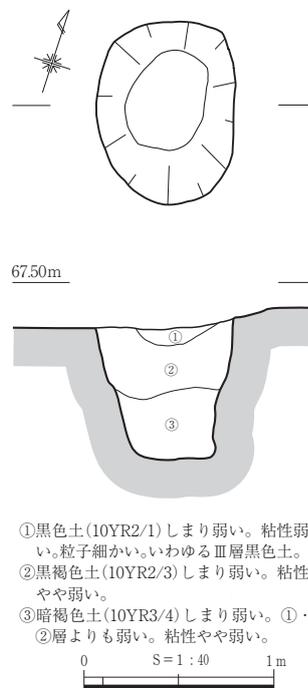
E18グリッド北側に位置する。X層上面で検出した、断面袋状を呈する土坑である。検出面の平面形は径0.72～0.80mの円形状を呈し、底面は径0.78～0.88mの隅丸方形形状を呈する。検出面から底面までの深さは0.88mを測る。

埋土は黒褐色土を主体とする5層が認められる。遺物は出土していない。出土遺物がないため、遺構の時期を特定できない。



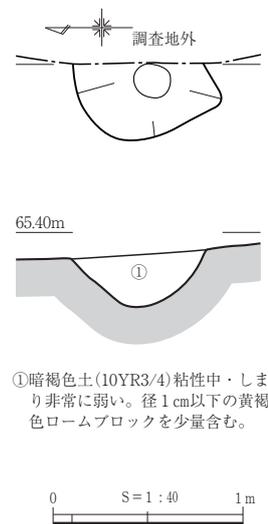
- ①黒褐色土(10YR2/2)粘性弱。しまり強。径3mm以下のローム粒を多く含む。
- ②黒褐色土(10YR2/3)粘性中。しまり強。
- ③黒褐色土(10YR2/2)粘性弱。しまり強。径3mm以下のローム粒をわずかに含む。
- ④暗褐色土(10YR3/4)粘性中。しまり強。
- ⑤黒褐色土(10YR2/2)粘性中。しまり強。

第64図 SK13



- ①黒色土(10YR2/1)しまり弱い。粘性弱い。粒子細かい。いわゆるⅢ層黒色土。
- ②黒褐色土(10YR2/3)しまり弱い。粘性やや弱い。
- ③暗褐色土(10YR3/4)しまり弱い。①・②層よりも弱い。粘性やや弱い。

第65図 SK14



- ①暗褐色土(10YR3/4)粘性中・しまり非常に弱い。径1cm以下の黄褐色ロームブロックを少量含む。

第66図 SK15

SK14(第65図、PL.36)

H14グリッド中央、南北に走る谷筋に位置する。平面形は長軸0.97m、短軸0.73mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは0.70mを測る。黒褐色土(Ⅲ層)掘削中に検出したため、本来の検出面はさらに高い位置にあった可能性が高い。

埋土は黒色から黒褐色土の3層が認められる。遺物は出土していない。

調査時は底面から常に水がしみ出していた。このことから、谷筋に集まる水の影響を大きく受ける位置にあることがわかる。出土遺物が無いため時期は特定できず、遺構の性格も明確にし得ないが、水辺に設けられた貯蔵穴の可能性もあろう。

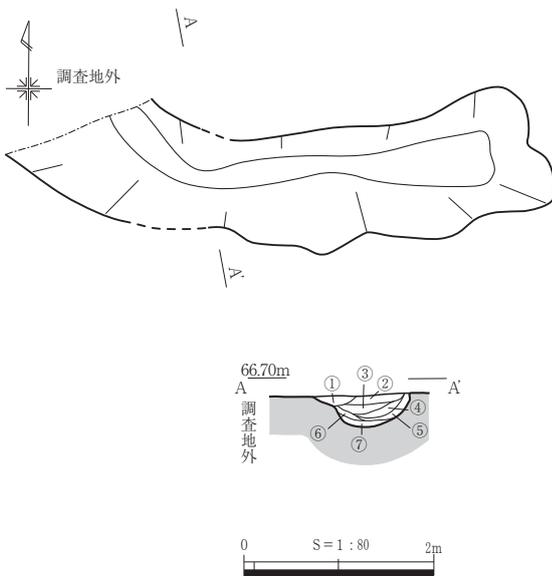
SK15(第66図、PL.36)

E2グリッド、調査地の北東隅に位置する。X層上面を精査中に暗褐色土のプランとして検出した。東半分が調査地外に延びており、平面形・規模は明らかでない。確認できた範囲では、東西0.40m、南北0.70m、検出面からの深さは最大0.30mを測る。底面は掘り鉢状を呈する。埋土は暗褐色土の単層で、出土遺物はなく、遺構の時期・性格ともに不明である。

3 溝

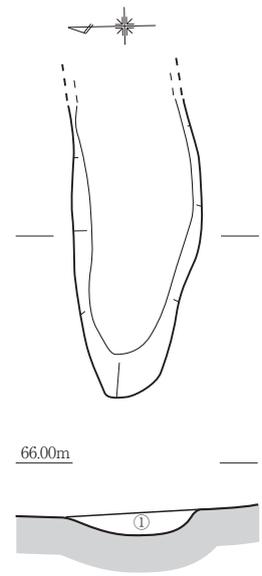
SD 1(第67図、PL.37)

D17グリッドに位置する。調査地内では一部分だけの検出にとどまり、北側は調査地外へと延びる。遺構は調査地の北端、1区の東寄りに存在し、本遺構よりも東側は谷部へ落ちていく斜面となる。後世の植樹などで壊されている部分が多いが、緩やかな湾曲をもち、東側へ延びる形態をとっている。幅は1.0~1.2m、深さ0.34~0.42mを測り、長さはおおよそ5.1mである。暗褐色を基調とする埋土は、全体的に少量の炭化物粒が含まれている。また、埋土の中に砂や礫の堆積はみられず、流水の痕跡は



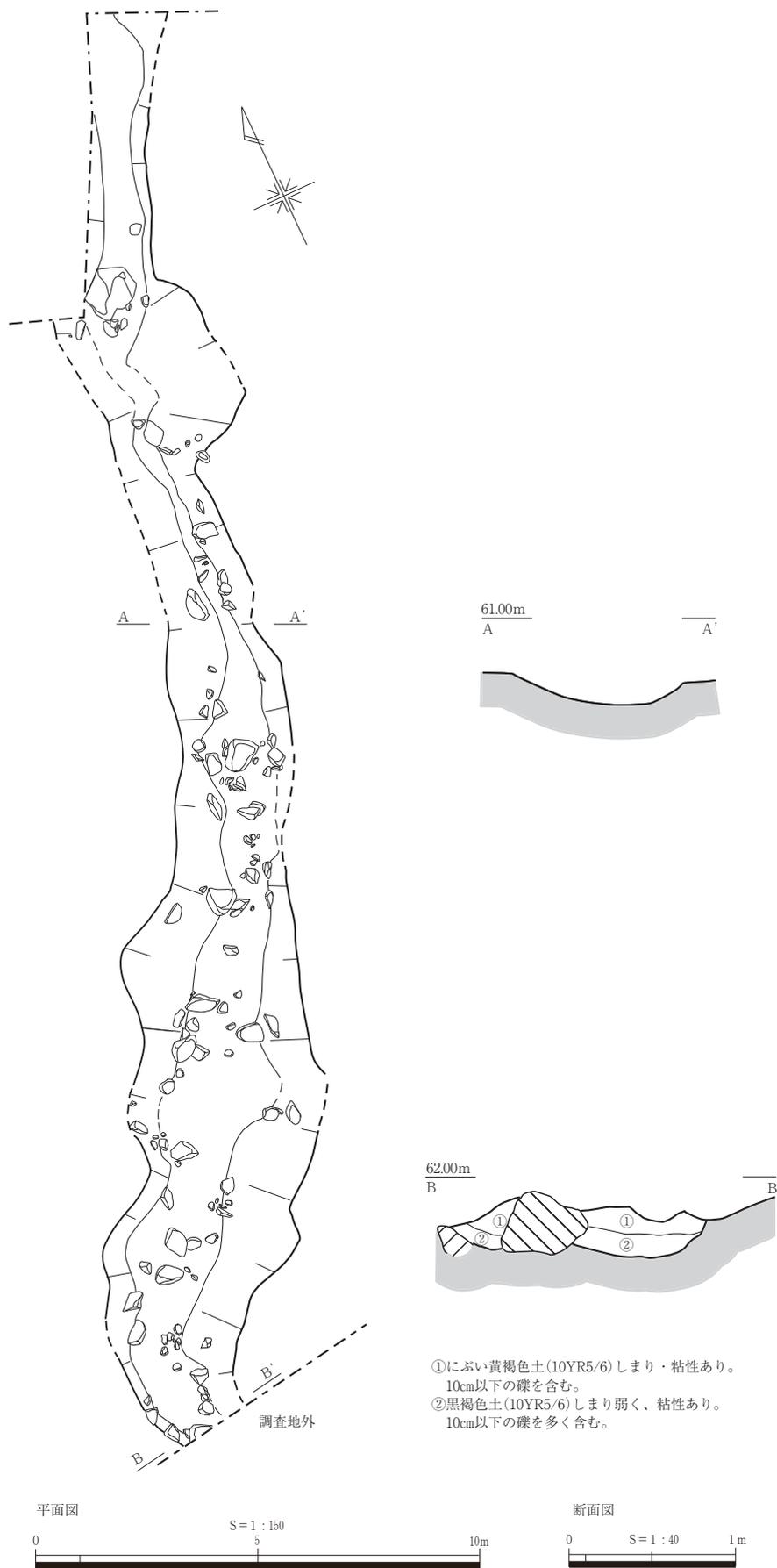
第67図 SD 1

- ①褐色土(10YR4/4)径1.0cm以下の炭化物粒極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ②にぶい黄褐色土(10YR4/3)径1.2cm以下の炭化物粒少量含む。しまりやや弱い。粘性強い。
- ③暗褐色土(10YR3/3)径5.0mm以下の炭化物粒極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ④暗褐色土(7.5YR3/2)径8.0mm以下の炭化物粒極少量含む。しまりやや弱い。粘性強い。
- ⑤黒褐色土(10YR3/3)径5.0mm以下の炭化物粒極少量、径1.5mm以下のロームブロック極少量含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑥黒褐色土(10YR3/2)径5.0mm以下の炭化物粒極少量、径8.0mm以下のローム粒多く含む。しまりやや弱い。粘性やや弱い。
- ⑦黒褐色土(10YR2/3)径5.0mm以下の炭化物粒極少量、径1.8cm以下のロームブロック極多く含む。しまりやや弱い。粘性強い。



①黒褐色土(10YR2/3)粘性・しまり弱。径5mm以下の炭化物をわずかに含む

第68図 SD 2



第69図 自然流路

うかがえない。

Ⅲ層上面にて検出したことから、本遺跡の中では比較的新しい遺構である可能性が高い。しかし、遺構内および遺構周辺において遺物は出土しておらず、時期・用途ともに不明である。

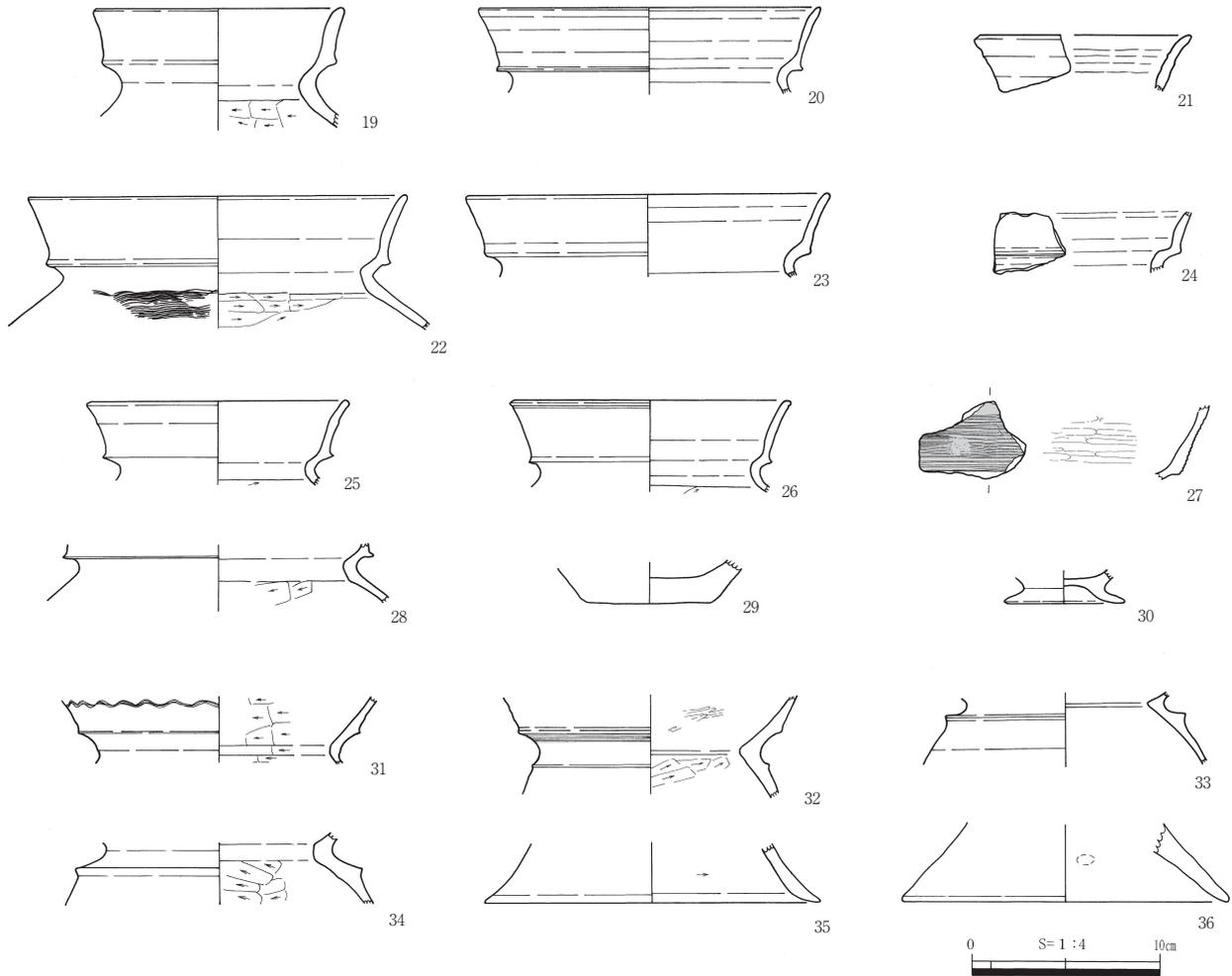
SD 2 (第68図、PL.37)

E 2 グリッド、調査地の北東隅に位置する溝状遺構である。X層上面で精査中、しまりの悪い黒褐色土のプランとして検出した。北側1 mにはSK13がある。主軸はほぼ東西方向で、東側は調査区外に延びるため、全長は明らかでないが、検出した範囲では幅0.7m、東西1.5m、検出面からの深さは最深部で0.1mを測る。

出土遺物はなく、遺構の時期・性格ともに不明である。

自然流路(図69・70、PL.37、48、写真4)

E 5 グリッドからH 6 グリッドにかけてやや湾曲しつつ南北方向に走る。検出した範囲で長さ32m、幅2~4.5m、深さ0.15~0.7mを測る。埋土には10~50cm程度の礫が多数含まれている。また、一部には径1 cm以下の細砂~粗砂で構成される薄い堆積も認められる



第70図 自然流路出土遺物

など、複数にわたって堆積が繰り返されている状況を確認した。

埋土中からは、周辺から転落もしくは上流から水流により運ばれてきたと考えられる遺物が出土している。出土遺物の大半が弥生時代中期後葉から古墳時代前期の土器片で、自然流路の底に近い位置に堆積していた②層中から出土している。この②層は、一部認められない部分もあるものの自然流路の全域に堆積しており、礫や粗砂を多く含んでいることから、短期間のうちに一気に堆積した可能性がある。19は弥生時代後期末の壺。20～26・28は古墳時代初頭の甕。おおむね口縁部下端の突出部は鋭く、25・26の口縁端部は平坦面をもつ。27は弥生時代中期後葉の高坏の口縁部か。外面に赤色塗彩の痕跡が残る。29は壺甕類の底部。30は低脚坏の脚部。31～34は鼓形器台。35も鼓形器台の脚部か。36は器種が判然としない脚端部片。



写真4 自然流路作業風景

第7節 遺構外出土遺物（土器）

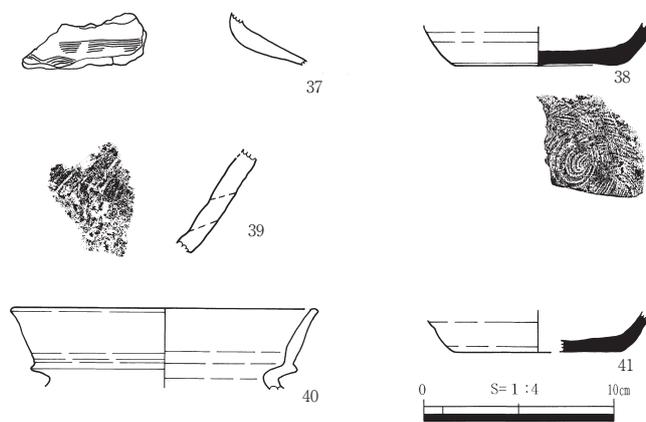
(1) 1区表土・I層(第71図、PL.45)

本遺跡の表土中およびI層からは、縄文～奈良時代までの遺物が出土した。それらのうち、ここでは土器を中心に報告する。土器も細片がほとんどであったが、遺存状態の比較的良いものを図示した。このうち、表土中出土遺物は37と38、表土下の遺物包含層であるI層から出土した遺物が39～41である。

37は甕あるいは壺の肩部片である。焼成はやや甘く、色調も白褐色で遺存状態はあまり良くない。器面は摩耗しているが、外面に6条の平行沈線ならびに波状文を施しているのが確認できる。また、内面調整は頸部直下からヘラケズリ調整を施している。他破片と接合せず、時期比定のがかりとなる要素は少ないが、ケズリの開始位置や施文などから、おおよそ弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に位置づけられる。

38・41は須恵器の坏である。いずれも体部下半から底部へかけての破片であり、底部残存率は低い。高台のない坏で、両者とも底部に回転糸切り痕を残す。38は糸切り痕が明瞭に観察でき、ロクロの回転方向は左回転であると判断できる。底部から体部への立ち上がりは丸みを持ち、口縁部は欠損しているものの、体部はゆるやかに湾曲しながら伸びていくと考えられる。底部の切り離しを回転糸切りによっていること、および残存部分の器形から、これらは8世紀中葉頃に位置づけられる。

39は縄文時代の深鉢である。胎土は粗く、長径2～5mmの石英と思われる透明粒子や砂粒を多く含んでいる。器面調整も内面がナデ、外面に条痕を施すという粗製のものである。条痕の施文は貝殻を使用していると推察される。粗製であること、体部片であることから時期の比定は難しいが、調整のあり方などからおおむね縄文時代後期～晩期の遺物であると考えられる。



第71図 表土・1区I層出土遺物

40は複合口縁甕の口縁部である。口縁部は外反気味に引き伸ばしており、口縁端部は平坦に形作る。また、口縁部下端は外方へつまみだすような形態をとる。器面調整は、内外面ともに横方向のナデである。口縁部のみの残存であり、詳細な時期比定は困難であるが、弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置づけられる。

表土、第I層からは、このほかにも摩耗の激しい土師器複合口縁甕の口縁部片や壺・甕の体部片などが出土している。

(2) 1区II層(第72図、PL.43・45)

1区の遺物包含層であるII層中からは、縄文～平安時代までの遺物が出土している。表土・I層と同様に細片が多かったため、遺存状態が比較的良いもののみを図示した。42・43は縄文時代の深鉢と考えられる。いずれも粗製で、42は外面に粗いナデを施して外面には条痕を、43は内面に緻密なミガキ調整を施し外面はやはり粗いナデで仕上げている。42の条痕は貝殻を使用したものと考えられる。破片のみの出土であるため全形や時期などの追究は難しいが、調整のあり方などから、おおむね縄文時代後期～晩期に位置づけられよう。

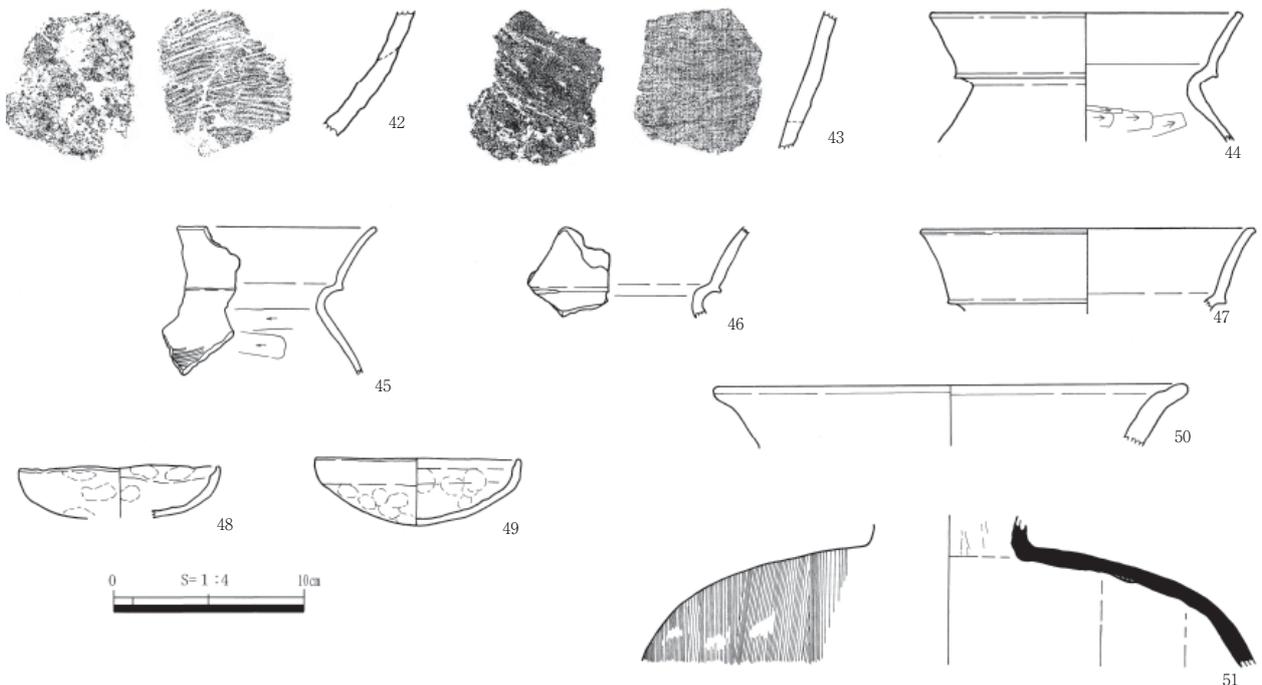
44～47は複合口縁甕である。44の口縁部内外面は横方向のナデで調整し、口縁端部を平坦に成形している。また、口縁部下端はやや下方へつまみだすような形態をとる。体部外面は口縁部同様に横方向のナデ、内面は頸部と肩部の境目あたりから横方向のヘラケズリを施している。口縁部形態などの特徴から、図示した遺物のなかでは比較的古い様相をもつものと捉えられ、古墳時代前期に位置づけられるものと考えられる。

45～47の器面調整は44と同様ナデ調整によっているが、44に比べると器壁がやや薄く、口縁端部も丸くおさめている。いずれも、口縁部下端は外方へ引きだすような形態である。45は、器面の摩耗が激しいけれども肩部まで残存しており、外面には波状文がみられる。また、内面には頸部の屈曲部直下からヘラケズリを施している。肩部が張らないことから、胴部最大径はあまり高い位置にあたらないと考えられる。46は口縁端部が欠損しているが、44・45に近い形態をとるものと推察される。

以上を概観すると、それぞれが小片であるため詳細な時期比定は困難であるが、形態的な特徴から弥生時代終末期～古墳時代前期中葉の年代におさまるものと考えられる。

48・49は手づくねによる土師器の坏である。いずれも器面調整は内外面ともナデと指押さえによっており、底部から口縁部下にかけて指頭圧痕が残っている。48は口縁部まで指頭圧痕が及んでいるが、両者とも口縁部のみ強いヨコナデを施している。また、49は尖底をもつのが特徴的で、底部は器壁が薄く、口縁部へ近づくほど厚くなる。

こうした手づくねによる土師器坏の類例としては、倉吉市法華寺畑遺跡（倉吉市2001）や同市下古川遺跡出土品（倉吉市2008）、中山町田中川上遺跡出土品（中山町2001）などがある。法華寺畑遺跡環境整備時の調査を担当した森下哲也は、これらの坏は伯耆国庁編年第2段階にしばしばみられると述べている。しかし田中川上遺跡では、それよりも古い型式の須恵器・赤色塗彩土師器などと共伴しており、土器の型式的には伯耆国庁編年第2段階よりもさかのぼる形となる。これらの資料を参考にすると、手づくねの土師器坏は、現状においては8世紀後半～9世紀にかけて、おおむね東伯耆に分布する器種であるといえるだろう。



第72図 1区Ⅱ層出土遺物

50は土師器甕の口縁部片である。口縁端部下の屈曲が大きく、内面にはわずかな凹みをもっている。焼成は堅緻で、色調は赤みのあるやや暗い褐色を呈する。胎土も緻密であるが、極小の黒雲母と白色粒子を多く含む。細片であること、また包含層出土ということもあり、時期についての詳述は不可能であるが、器形的特徴から奈良時代後半～平安時代前半の遺物であると捉えられる。

51は須恵器の横瓶である。頸部から肩部へかけての破片で、復元胴部最大径は32.6cm、体部の残存率は30%程度である。胴部外面にはカキメ調整を施しており、肩部には自然釉が付着している。焼成は堅緻で、胴部には焼きぶくれも散見される。横瓶は型式変化があまりない器形であり、時期比定は非常に困難であるが、肩部がなだらかになること、頸部の接合方法が単純な継ぎ足しであることから、古墳時代後期以降の時期に帰属するものと推測する。

このほか図示できなかつた遺物としては、44～47のような土師器甕の口縁部片、内面にヘラケズリを施して器壁を薄くした土師器の壺・甕と思われる体部片、土師器高坏の脚裾部、内面に青海波の当て具痕跡をもつ須恵器甕の肩部片や体部片などが出土している。

参考文献

- 倉吉市教育委員会 2001『法華寺畑遺跡環境整備事業報告書』倉吉市教育委員会
- 倉吉市教育委員会 2008『下古川上通り遺跡第2次発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- 西尾秀道編 2001『田中川上遺跡』中山町教育委員会

(3) 3区 表土(第73図、PL.46)

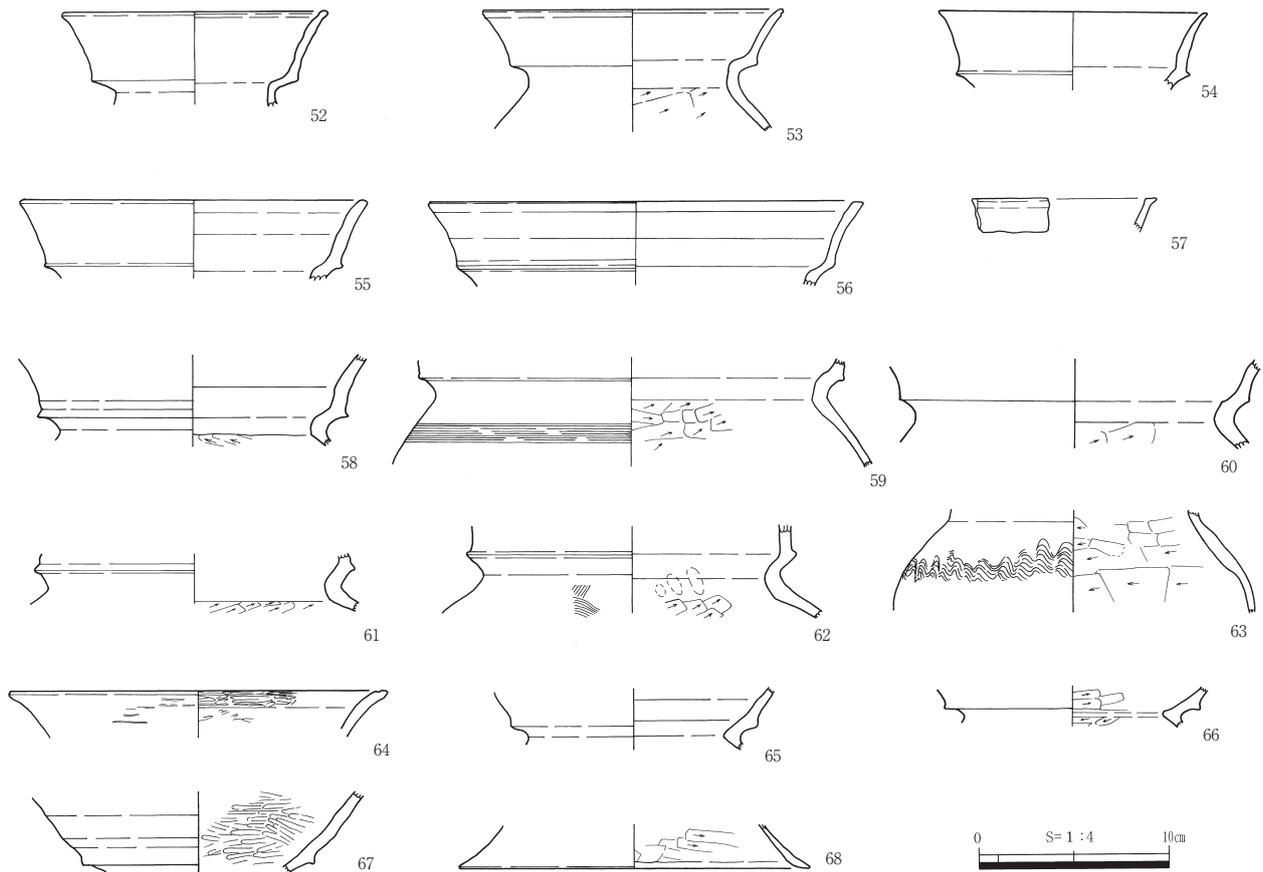
3区の表土中からは、比較的多くの遺物が出土している。特に丘陵部から谷部へ下っていく斜面、あるいは谷部においての出土が目立つことから、丘陵上からの流出土とともに流されてきたものであると考えられる。ここでは、遺存状態の比較的良好なものを選んで図示した。

52は複合口縁壺の口縁部と考えられる。内外面ともナデ調整によっており、口縁部は外反させながら上方へ引き伸ばしている。口縁端部は丸くおさめ、口縁部下端は外方へつまみ出すような形態をとる。

53～56は複合口縁甕の口縁部片である。このうち、53と54は口縁端部を丸く整えている。しかし53に比べると54は器壁が薄く、口縁部も長めで端部を細く引き伸ばしている。また、53は部分的にはあるが、頸部下まで残存している。頸部から体部にかけての調整は外面が横方向のナデ、内面は頸部の屈曲部直下から横方向のヘラケズリを施している。一方、55と56は53・54と異なり、口縁端部を平坦に形作るものである。口縁部は内外面ともにナデ調整によっており、わずかに外反させながら外方へ伸ばしている。口縁部下端は、外方へつまみ出すような形態をとる。

57は布留系甕の口縁部片である。内外面ともに横方向のナデで整え、口縁端部は平坦に形作る。口唇部は平坦面の中ほどをわずかに凹ませ、外方へつまみ出す形態である。細片のため全形や口径の復元は不可能であった。

58～62は複合口縁甕の頸部片である。いずれも口縁部は欠損しているが、その中でも58は口縁部が比較的残存している。ただし口縁端部は欠損しており、端部形状や口径は不明である。残存部分についてのみいえば、どちらも口縁部を外反させながら上方へ引き伸ばしており、口縁部下端は外方へ引き出している。58は器壁が5.5mmと厚手である。頸部以下の器面調整は、いずれも外面は横方向のナデによっており、内面は頸部屈曲部の直下からヘラケズリを施す。一方、59～61は口縁部がほとんど残存していない。ただ、59・61は稜から上を見る限りでは、口縁部は内傾あるいは直立するものと予想される。また、59は外面に多条の平行沈線文、62は縦方向のハケ調整と波状文が認められる。体部



第73図 3区表土他出土遺物

内面はいずれも横方向のヘラケズリ調整によっているが、頸部下に指頭圧痕の残る点が特徴的である。

63は壺あるいは甕の体部片である。外面の肩部上方に波状文を施し、内面調整は横方向のヘラケズリで薄く仕上げている。体部の残存率は25%で、復元の胴部最大径は18.8cmである。

64～68は鼓形器台片である。64は口縁部、65～67は脚柱部から受け部、68は裾部の破片である。64は器面が摩耗しているが、内外面に横方向のヘラミガキがわずかに見てとれる。また、67は外面が横方向のナデ、内面が横方向のヘラミガキである。それに対して65は、器面の摩耗が激しいこともあるのだろうが、内外面ともにヘラミガキ・ヘラケズリは認められない。一方、66・68は外面が横方向のナデ、内面は横方向のヘラケズリ調整である。どの個体も小片であり全形の復元が困難なため、天地が逆転する可能性も考えられる。

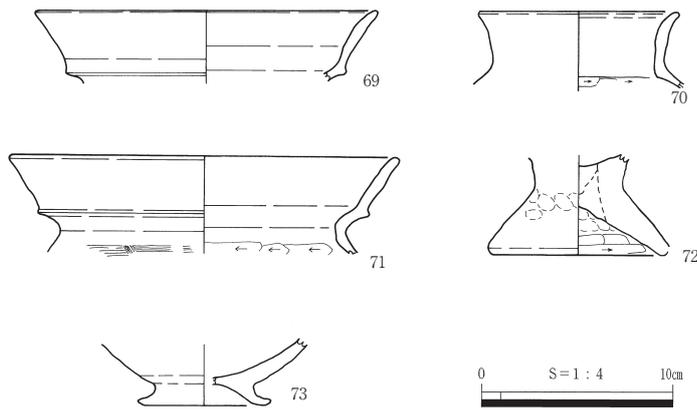
このほか図示できなかったものの中には、高坏の脚部片と思われるものも散見する。表土中からの出土ではあるものの、遺物の時期幅はある程度絞られていると推察できる。おおむね弥生時代後期後葉から古墳時代前期中葉におさまるものと考えられる。

(4) 3区 VII～IX層他(第74図、PL.43・46)

3区の丘陵上の造成土、斜面部および谷部に堆積したVII～IX層からも、わずかながら遺物が出土した。ここでは、その中でも遺存状態の良いものをあげる。

まずは、斜面部出土遺物から取り上げる。第74図の70が該当する。70は単純口縁の直口壺である。小片であるが小型の壺で、頸部の口縁部の立ち上がりも3cmとあまり高くない。

次に、谷部VIII・IX層から出土した遺物について述べる。71・72はVIII層から出土した。



第74図 3区Ⅶ～Ⅸ層他出土遺物

71は複合口縁甕の口縁部である。口縁部の調整は内外面ともに横方向のナデであり、口縁端部は丸くおさめている。器壁はⅦ層から出土した70に比べると厚手であり、端部の形状にも違いがある。また、口縁部下端は外方へつまみ出すような形態をとる。体部は外面に多条の平行沈線文を施し、内面は頸部の屈曲部直下からヘラケズリで調整している。

72は低脚坏あるいは台付壺・甕の脚部と考えられる。身底部に粘土を巻きつけ、短い筒部に粘土を充填している。また、身の見込み部分にはナデ調整を施している。脚部の器壁が厚い点、筒部にみられる粘土の充填など、少なくとも伯耆周辺の遺跡では類例がみられず、時期・器形ともに不明である。69はⅨ層から出土した複合口縁甕の口縁部である。調整は、内外面ともに横方向のナデによっており、口縁部は外反させながら上方へ引き伸ばしている。口縁端部は丸く、口縁部下端はやや下方へつまみ出している。

73は低脚坏の脚部である。3区丘陵東側斜面の造成土から出土した。底部残存率25%、復元底径7.5cm、脚部高1.1cmと脚が非常に低い。器面の摩耗が激しいが、脚・坏身ともに内外面をナデで調整している。坏身はどちらかといえば鋭角気味に立ち上がるため、やや深めの形状をとるものと考えられる。

72のように時期比定の困難な遺物も含まれるが、これら包含層出土の遺物もおおむね弥生時代終末期から古墳時代初頭の範疇におさまるものと考えられる。

以上が、3区Ⅶ～Ⅸ層および造成土から出土した遺物である。3区の土層堆積は斜面部や谷部が主であり、谷底にほど近い斜面部から多くが出土していることから、これらの多くは表土出土遺物と同様、丘陵上方から流れ込んだものであろう。

参考文献

松井 潔1997「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器」『古代吉備』19 古代吉備研究会
 中川 寧1996「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学』13 島根考古学会
 松本智弘1996「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学』13 島根考古学会
 藤原哲・秦愛子2004「出雲地域における窯跡出土の須恵器—大井古窯跡群における6世紀末～8世紀の資料を中心に—」『島根考古学』20・21 島根考古学会
 柳浦俊一1986「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会